この季節になると、ぼくはい の場所で、 ぼくらは 1 ・つも一 つも和月ちや 緒だった。 んのことを思い出す。

八月もこのくら い夕日の射し込む台所を出て、大きな声を出した。 時間になるとだいぶ涼 しい。 ぼくは 布巾で手を拭う

「おばあちゃん、ぼくちょっと買い物に行ってくるね」

まった け れど、おばあちゃんの返事はなかった。また一人でどこかへ行 のではないかと不安になって、ぼくは家の中をあちこち見て廻る。 ってし

縁側にも居間にも仏間にも、 その時突然、 どこかで何かがたくさん崩れ落ちる音がした。 お座敷にもトイレにもいない。

夕陽の満ちた中、 る埃の匂いが、鼻をくすぐる。 本を拾っていた。 急いで駆けつけたぼくがお父さんの書斎のドアを開けると、 机の上の山積み おばあちゃんは曲がった腰をさらにかがめて、 の本が崩れた音だったようだ。 窓から入る 巻き上が 一所懸命

息が上がったぼくは、きれぎれの声で訊いた。

「おばあちゃん、どうしたのこんなところで」

おばあちゃんはゆっくり顔を上げると、 ぼくの顔をじ 11 0

何も言わなかった。 ぼくは黙って待った。

なんて言うたか、 ええ」

「齋夜」「なった。」ではいいが、 こらえきれず、 ぼくは言った。

や。ぼくの 前

ぽくて少し舌の回らない するとおばあちゃんは、 声で、 顔中にうれ やさしくぼくに言ってくれる。 しさをにじませて笑った。 11 がら

「ああそうそう。ゆうちゃん。 ゆうちゃん」

あちゃ んに笑い かけた。 それからもう一度尋ねる。

「それでおばあちゃん、 ここで何してたの

「ええ?」

た本の山を見て、それか すっかり驚いた顔になって、 2ら寂 しげ おばあちゃん にこう呟い の表情が 沈 い

んだろうねえ」

物のように見えた。 くり座らせてあげた。 ぼくはおばあちゃんを居間まで連れてきてあげると、 大人しく縮こまったおばあちゃん の姿は、 座布団  $\overline{\mathcal{O}}$ まる で置 . ф 0

を口ずさむおばあちゃんの声が、ずっと頭の中で回ってい 間独りにしておけないし、 ってしまうかも知れない。家を出るとき背後から聞こえた、楽しげに そうしてからぼくは、 し、もうずいぶん日が陰っているから、商店街へ急ぎ足で向かった。おばあち おばあちゃんを長 た。 へしげに童 歌、お店も閉ま ちゃんを長い

二人連れで喋り をかけてきた。 夕焼けで橙に染まった橋の辺りまで来ると、 井戸さんだった。 ながら歩いてくるのが見えた。 商店街の方からおばさん ぼくに気付くと、 、一人が声

「あらゆうちゃん、 お買い物?」

気にしない振りをして、ぼくは尋ねた。 もないと思うけれど、慣れだからかぼくが幼い 未だに近所の人はぼくをそう呼ぶ。もう今年で十七歳なのにゆうちゃん のか、どうにも仕方がない。

まだ開いてましたか、八百屋さんと」

「一之瀬さんとこ?」「あの、まだ開いてま

最後まで聞かずに井戸のおばさんは、大きな声で答えた。

「だいじょぶよう、ゆうちゃんが頼んだら、 閉めてからでも開けてく

ぼくはなんだか、厭な気持ちになった。 何が と隣のおばさんに言うと、 面白かったのだろうか、 いつまでも二人して笑い続け 井戸さんは大きな声であはは ては いる。

ゆうちゃん。 おばあちゃん大丈夫?」

この 間はありがとうございました」

ちょ も心配ねえ、この い ゅっと聞い のようそん てあ 別間はびっく のね ご近所なんだから、 りしたわぁ何ごとかと思った。ね川なんだから、家族みたいなもんじゃ 漫さん、ない。で

しゃ 村八分にされたら最後、 のが分かった。けれどあんまり反感を買うとよくない。こんな小さな島だ、 から早く行かせてほしい。 べりたいことだけしゃべり続けた。 、さんはそう言うと、 うちみたいな事情では生きていけない ぼくはだんだん自分が仏頂面になってきてい ぼくのことな いつもこうだ。 んかほったらかしに そんなことは V

る V

戸 の そうしてぼくが一人むっつりしていると、 おばさんが気になることを言った。 ふいに思 V 出したように、

あはははははは、とおばさんたちはまた顔を見合わせて笑っう。おじいちゃん、怒って先に帰っちゃって」 てもらいに行ったときにお話ししてね 「陽くんのお母さん。宗像さんから直接。今日う「陽くん帰ってくるの。ずいぶん急じゃない? ああそうそうゆうちゃん。 ぼくはさっと顔を上げた。 聞いた? 川邊のおばさんがへえ、 明日ようちゃ 今日うちのおじいちゃん つい話し込んじゃって大変でも それ誰 と目を丸くする。 ん帰ってくるって」 から聞 いた の腰診

「あの」 ぼくはこらえきれ ず、つ けん どんな調子で言った。

「ぼく、 もう行かないと」

ほら急いで行ったげて。 ーごめんねぇゆうちゃん。 おばあちゃ ん待たせてるんでしょ?」んのおしゃべり付き合われ り付き合わせち

っているなら話しかけるな。

くは軽く頭を下げると、 急いで橋を渡った。

して電話 よくなかった。 少し遠くに見える神凪商店街のアーチを見据えて、 の一つもないんだ。 どういうことだろう。 帰ってくるなんて聞い ぼくは急ぐ。 てない 気分は

むせ返るほど強くなる潮の 直前 息が上が 匂 0 てきた。 いを感じながら、 心臓が痛 ぼくは走った。 苦しさに一度立ち止くは走った。けれど商

そしてふと顔を上げると、 遠くで八百屋のシャッ ター が閉まるのが見え

よその家の窓から漏れてくるテレビの音が、 ひどくつまらなそうに聞こ

さす。 かった。八百屋さんとまたぐちゃぐちゃ会話することすら億劫だ。 は出来るだろう。けれどもう、今日はそこまで積極的に動く気にもなれな 小さくため息をついて、玄関の引き戸を開けた。 とぼとぼと歩い 確かに井戸さんの言うとおり、無理に頼んで店を開けてもらうこと て、 ぼくは家に帰り着いた。自分の体力のなさに嫌気が

するとそこには、おばあちゃんが仁王立ちで立っていた。ぼくは

「黙ってどこ行ってる」

点は、どこかぼくから少しずれたところに合ってい じっとぼくを見て、すごい剣幕でおばあちゃんは言った。 けれど目の

「毎日毎日勝手に出歩いて」

「おばあちゃんぼく」

「ああもう聞 かん聞かん、 言い 訳は聞きたない

. ツ

「おばあちゃんもっと声小さくして、 またご近所に」

「はア、心配しとる母親に向かってなんというまあ。 もうい もうい

今日という今日はお父さんに叱ってもらいますからね」

「お父さん、お父さんッ。千穂を叱ってやってな、こンの馬鹿娘を」「おじいちゃんもお父さんも、もう死んでるよおばあちゃん」

お母さんももう死んでるよ、とはとても言えなかった。

確かにぼくはお母さん似だ。

食器を片付けてお風呂に入ると、 んとかおばあちゃんをなだめて、 夕飯を食べてから床に もう十時過ぎだった。 0

と思い が島を出て行って以来、結局 なおしてやめる。 VVV 7 て いる。 ある電話 つもこうだ。 しばらく迷っ  $\mathcal{O}$ \_ 度も電話を掛け 前 で、 ぼ た。 くは 11 つでも最後には気が けれ ふと、 T V ど、 立ち な もうこん カコ 止 0 まっ 引け な時間だし 陽の て、

要は、怖いだけなのだ。

離されたような気がして、 分  $\mathcal{O}$ 部屋に入りドアを後ろ手に閉めると、 ず いぶん落着いた。 んとなく部屋が他 から

てきた気がする。 毎日気疲れすることばかりだ。 もうこんな生活も四年近い。 おばあちゃ 加減慣れてもい んの具合も、 V 0 にと自分でも思う。 だんだん 悪く な 2

来るのだろうか。 どうかは分からな き込みは増えたし理解も出来ていると思う。 が死んだときだ。 みんなに頼んで買ってきてもらったものだ。 勉強机に つくと、 二時間くらいで参考書を閉じた。 そしてぼくが大学に行くとすれば、 ぼくは高校数学の参考書を開い 模試も受けたことがない。 あれから一年、 け れど、 大検を受ける日 た。 それは 外へ出て通用 どの お の夏、 ば 科目も書 あ は本当に するか Þ 外

その ては島 年の夏、 しげだった。 布団を敷きながらぼくは考えた。 中で一人小さくなって  $\mathcal{O}$ 外はどうか、 島を出て高校 胸を張っ 高校はどうかと話を聞 て笑って帰っ へ行 いた。 ったみんなが、 あれからもう、 てきて、 初めて帰 島 か れて のあちこちで呼 いた。そし ってきた。 \_ 年も経っ てぼ び 4 たのだ。去 んな誇ら 止 めら n

ない ってくれるような近 んをほったらかして島を出るなんてことは、もちろん島に残ったことは後悔していない。 うく耳打 父方にも血 の遺産と保険金で細 母方はずっとこの島で暮ら されい  $\mathcal{O}$ つながりのない 人は、 る伯父さん は存暮ら 誰 んがい している以上、施設に預 なかっ おばあちゃ た。 た。 してきた家だから島 あんな人たちに というよ 絶対に出来な あと数年のことだか んを好きこのんで引き取 り、 はも V ) けるのも無理  $\dot{O}$ 外に お父さん おば う、 は あ

どんな理由があろうとも島を出ることは出来ない 11 つまでも、 この島にいなければならない のだ。

彼との間はもう少し、 こどもたちは誰もが友達と言ってい うと思ってひと月も前から待っ その後も電話はない。避けられているのか、とすら思った。思ってひと月も前から待っていたのに、陽は一言の連絡もく なの影に彼を探していたぼく の少しは違うつもりだっ 陽が帰ってこな いほど親しいけ それを知らされて力が抜け かっ れど、それでもぼくと 彼に色々 別から降 相談 れな カュ しよ

それともただ、忘れられただけだろうか。

気もしたけれど。 年はなぜ帰ってこな だから、今ごろになって帰ってくると聞かされても、 しろ不安だ。 かった 鬱陶しがられているか、  $\mathcal{O}$ か。 聞きたくなかった。 無視されるの なんとなく、 気持ちは微妙だ そもそも去 分かる 0

持ち らも紛れる。 布団にもぐり込ん で、 ぼくは電気を消 した。 勉強をして い日 れば、は、

布団の中でふと思った。

茫漠とした心配と悩みを抱えたまま、ぼくは眠りについた。みんなが帰ってくるということはもう、お祭りの時期なのか。

5.

た。うつ てしまったと思った。 翌朝は晴 すらと窓から入るまだぼ れ てい たもの 寝坊だ。 0 夏の神凪島ではい やけた日光で、 つも通 ぼく は ŋ 0 目を覚ます。 肌 寒い 空気だっ

そして、 出来なくなってきた。 していた頃はありがたかったけれど、最近ではだんだんどうにも一人では おばあちゃんは昔からの習慣で、暗いうちからとっくに起き出している。 一人であれこれと先にやってしまうのだ。五年前、まだしっかり

もの が不如意で服が水浸し、廊下や畳に雫を垂らして歩きまわ んもお鍋も火にかけ ようとして 何度も何度も洗濯するし、 三枚 つばな の遺影をみんなひっ Ľ お米は水に それをしている水につけっぱん くり返 してしまった。 るお な ば あちゃ なく

れでも しそうにしていた。 まるで初 ぼくは、 めてお手伝いをしたこどもみたい 何も言えなかった。 に、

け、朝は出来るだけ早く、 そんなことがあ けれど昨日は、 って以来、 寝付きが悪かった。 ほとんど真っ暗なうちから起き出すように ぼくはやか 暗なうちから起き出すようにしてんには雑貨屋で買ってきた笛をつ

母さんの寝室にも誰もいなかった。どこを見ても薄い埃と黴の臭いが むきながら廊下の角を曲がった。 人は誰もおらず、冷たく、 日のままだし、 をゆっくり歩きながら、 ぼくは布団から飛 おじいちゃんの書庫も静まりかえっているし、 び起きると、 そして静かだった。 あちこち部屋を見て回る。 パジャマのままで部屋を出た。 虚しくなって、 お父さん ぼくはうつ お父さんお の書斎も昨 きし

するとそこに、おばあちゃんがうつぶせに倒れていた。

「おばあちゃんっ」

おばあちゃんは首や腕をぎこちなく動かしながら呻い ぼくは血の気が引いた。 大声で呼ぶけれど返事はない。 て V 近くに寄ると、

ぼくは震えながら膝をつき、 おばあちゃ んの肩を触って声をかけた。

「おばあちゃん、大丈夫?」

あ。だいじょうぶ。ちょっと。こけた」

「どこか痛くない?」

<sup>-</sup>ああ。だいじょう、ぶ」

すり泣 しなければならない、 か分からない。 どうしよう、 きが止まらなくなった。 ない、落着かなきゃいけないと思えば思うほど、涙が出てくる。おばあちゃんは動かないままだ。 とひたすら頭が混乱 した。 ぼくひとりでどうしたらい なん とかの

おばあ、ちゃん、ぼく、先生、呼んで、くるね」

「いらん。いらん。だいじょうぶ」

ル履きで家を飛び出した。 そんなことを言うおばあちゃんを後に残 まだ薄暗く涼 し、残し 早朝のご の外は、うっすらと靄がらけながらせながらせながらせながらせながらせながらせいかい すらと靄が

かかっていた。

凪島診療所にたどり着く。 閉まったガラス戸を叩き続けていると、 もちろんまだ開 いていない。 しばらく して寝起きの 薄灰色  $\overline{\mathcal{O}}$ 力

「はいはいはい、なんですか

と言っても陽のお父さんだから、 若先生が、カーテンの隙間からその神経質そうな顔を出した。 もう五十過ぎだ。 眼鏡を上げてぼくの顔 若先生、

を見ると、先生は顔を歪ませて言った。

「ああ、

「あの、若先生、さっき」

「もう若先生じゃない。親父は死んだ」

白髪交じりの眉をしかめて、若先生は不快な声を出す。 い

こうだ。ぼくは焦る気持ちを抑えて、何とか言い終える。 「宗像先生。さっき、 おばあちゃんが倒れたんです」

すると、ようやく先生の表情が変わった。

滅入る臭いをたたえていた。遠くから、 先生を待つ間診療所の中をのぞくと、 と言う若先生の声が聞こえた。 ちょっと鳴橋さんのところ行ってまだ暗い待合室が病院独特の気の

おばあちゃん を布 団に寝かせてやっと人心 つくと、 ぼくは先生に

「あの」

ぐに返事をするのだ。 なれない。この人はいつも、 機先を制して若先生は答える。こういうところも、「大丈夫だよ、とりあえずはね」 相手の言うこともろくに に聞かないうちからすぼくはあまり好きに

ってただけだから。でももう年が年だし、 「本当にただ転けただけのようだし。 そして先生は、小さくあくびをした。 その時あちこち打って、 しばらく動かさない方が 動けなくな

「それじゃ、 僕は帰るよ」

先生はその腫れぼったい目をぼくに向けて苦笑した。

先生は目を細める。 たわけじゃなし。 君も何かと大変でしょう。

「君に悪くすると 陽に怒られる」

ぼくはうつむいた。そして、厚意に甘えておくことにした。

落着いたこともあって、ぼくは先生にもう一つ尋ねた。

先生、陽くんは」

てくるって。 今日帰ってくるよ。 なんか本土のみんなと示し合わせて、一□帰ってくるよ。聞いた? 昼過ぎかな、 一緒に帰ってくるらし、連絡船に乗って帰っ

、よ。よく、知らない、けど」

言いながら、先生はまたあくびする。

「じゃあ、また何かあったら、うん、そうだね、 おばあちゃんが

動

け

うになったらでいいから、 一度診療所の方まで連れてきてあげて」

げに足を引きずりながら、帰っていった。 もう呼ぶな、 ということかなとぼくは少し思った。 そして先生は、

ぼくは、おばあちゃんの枕元に膝をつい た。 おばあちゃ は、 ゆ

と目を開けた。

「おばあちゃん」

ぼくは声をかけた。 けれどおばあちゃん 何 か言いたそうに口をゆる

ゆると動かしたきり、何も言わなかった。

ぼくはすごく、悲しくなった。

しばらくぼくが何も言わず涙をぬぐっていると、 ほとんど聞こえな

すれた声で、おばあちゃんは言った。

「泣かんの」そしてちょっと笑った。「男の子でしょう」

なぜだか切なくなった。

それをナップサックに入れて背中に背負うと、 おばあちゃ った。そこでぼくは、 んが眠ってから、 台所でいくらかの飲み物とおにぎりを用意して、 陽たちが帰ってくるまでにはまだ大分時間 静かに家を出た。

もうすっかり外は明るく、 暑くなりだしていた。 かまびすしい 蝉の声が

くら三人だけ いしょの場所だ。 の場所だ。 そしてずっとこれからも、 つからない ようにぼくは気をつけた。 誰にも教えな

蒼く繁る木 の鳴き声が マと草 つからないまま、 幾種類も幾種類も混ざり合 々が、空 一へ向か ぼくはあ 2 て大きく伸 の石段 0 って耳に届い 下へ来た。 Ţ て いる。 見上げ おそろしく れば 、力強 Ш

遮られ、 ここは飛鳥馬神社という、この島の中上りきるとそこには鳥居があって、 無数に建って い落着いた場所だ。 一段の石の階段を、 そしてぼくは、古びてあちこち欠けた、 足下は緑色に薄暗かった。 何だかそ しっかりと踏みしめながら上った。木の枝葉で日は れに、 の中心にあって、 見つめられ 段の周 その向こうには、大きな本殿があ 先も見えないほどに長い二百 りの暗が ているような心地が ずっと昔から変わらな りには、 小さな石像が る。

あった。 った暗い本殿の裏へそっと足を向けた。 ぼくは辺りを見回した。 近々ある夏祭りの準備だ。 ぽつぽ つと、 誰も 丸太や大きな布がまとめて置い いないことを確かめて、 ぼく は 湿 7

と見ただけでは隙間なく草木が生えているようにし そこには鬱蒼と生い繁る森が はす ぐに分かった。 人を遮るように L ひて広がって てい 11 け れど、 ぱっ

森の中へ続く秘密の路に、ぼくは迷わず足を踏み入れた。

お父さんがぼくに教えてくれた、ただひとつのものだ。

たの 母さ が沈 航海なのになぜ持ちこたえられ お父さんもお母さんも十四年前、 んでそのまま帰ってこなかった。滅多に島の外 がなぜ行ったのか、 なぜほんの少し先も見えない 知らな そしてそん なか ぼくがまだ三歳の頃、 ほどの ったの なときに限 霧が出た か、 なぜ誰も助けてく 0 出たのか、たった五十分ってなぜひどく海が荒れ へ出なか かったというお本土から帰る船 ħ な

二人とも身体の だろうと思う。 強い方では な とにか カゝ 2 たら たらしいし、 死 それはぼ ん だ。 それだけ くも 同

くは二人のことをほとんど憶えて はそれ以上の É  $\tilde{\mathcal{O}}$ にはならな いない。 そしてぼくに残った記 写真は 11 くら かあ

しょに来たこの 秘密  $\overline{\mathcal{O}}$ 路 のことだけだ っった。

くは思い出す。 「脇道にそれると二度と帰れなくなるぞ」と笑っ 枝木が張り出し枯 小さなぼくの手を引い れ葉と苔が .敷き詰めら てこの細い路を通ったお父さんは、 れた路を黙々と歩きなが て言った。 そしてその二 さら、ぼ

週間後に、お父さん は死んだ。

路が終わった。

そこには大きな木々と、 いベンチが ある。

りていった。 出した枝葉に いる。 広場のように円く拓けている場所だ。そこには大きな木々と、石のベンチが すり鉢 のように中心に向かってわずかに傾いに円く拓けている場所だ。地面は黒い ほとんど覆わ れている。ぼくはゆっくり気をつけて、 ているのだ。 土と苔と蔦で覆わ 空は 坂を下 張り れ 7

と以前から生えていないと無理だ。 になるには一体何年かかるのだろう。 ごつごつした表面には、 木だと思うけれど、 異様なのは六本、 あまりに太く大きく育っていて、 兄弟のように生えた巨木だった。 他の植物がたくさん絡み張り付い 少なくとも、島に人が住みつくずっ よく分からなかった。 真っ直ぐだから杉の ている。

いる。 ベンチが置いてある。 だから偶然なのだと思うが、木々は綺麗に三本ずつ、 路の出口に立つと、 ちょうどそう見えた。 そしてその中心に、 左右対称に生えて 石の

そっと腰掛けた。 二つの土台の上に据えてある。 それは明らかに、 、割れ、角は丸くなっていて、手触りは冷たく優しい。 人が作った物だった。 *\* \ つからある物かは分からない。 切り出された大きな一枚岩が、 ぼくはそこに、 あちこち

も続いていた。 ように巨木がそびえ、 いけれど、本来いるここに座るといっ るべき場所にいるように感じるの つも、 さらにそれら全体を囲むように、 ぼくはとても素直な気持ちになれ だ。 古い森がどこまで 周りはぼくを守る る。 説 明は難し

すると、ぼくはとても正しい 気持ちになる。

勝手に作ったものだ。 そして、 ここが本当に神さまのおわすところなの 絶対にそうなのだと全身で分かる。 きっと、 Ш へ登るのが億劫になったのだろう。 あんな神社なん だと分か る。 か、 理由 な

こを教えるつもりはない。してみんな、この正しい場所を忘れてしまった。 だからぼくは、

てまたここで会うことは、 教えたのは大切な、ぼくのふたりの友達にだけだった。 たぶんもうない。 でも、

和月ちゃんも、ぼくから遠く離れていった。

ぼくは足下の黒く柔くほぐれた土を、 じっと見つめる。 すると気が安ら

しばらくぼくは、何もせずに休んでい 何もせず何も考えず何も感じず、 た。 ただそこに在 少しずつ身体から力が抜けて った。

この上なく優しい気持ちになれた。

ふいに、草の擦れる音が背後から聞こえた。 ぼくは振り向く。

木々と草々の暗闇の中、 少し離れたところに、

真っ白い着物を着た、 長い

髪の小さなこどもが

ひとつ白い影がある。

と 立 つ ていた。

ぼくは驚き、 立ち上がる。

こどもは闇に消えた。

「ゆうちゃん」

ぼくは顔を上げる。

「ほら、 船が来たよ」

出した光景に酔っていた。 の乗ってくる連絡船を迎えるために港まで来て くに言ったのだ。今はもう昼過ぎ、 ぼくは気がついた。 隣にいた川邊のおばさんが、 あの場所からいったん帰って、陽たち いる。 にたにた笑いながらぼ つの間にか、

していることに耳を澄ました。 がやがやと喋っていた。みんな暇なのだ。ぼくはぼくの周りでは、気付けばずいぶん大勢の町の 人たちが なんとなく、 出迎えに来て、 みんなの 話

夏に帰省してくる人の数は年々減ってきている。 みんな、 お正月だけで

て照り返して、 たくさんだと思うようになるらし そうしてからぼくは、目の前の海を見た。夏の空の力強い色合いをすべ 海は途切れることなくさざめいている。 白い古びた連絡船が みんなして話しているようだった。僕は息を吐いた。 だから今年は、 のっそりと近づいてきた。 お祭りが危うい。 やがて、ざあっと

半袖短パンのヤツがいる。満面の笑みのそいつは、どうやら崇嗣のようだ徐々に近づく船の舳先には、両手をバンザイしてぶんぶん振っている、 相変わらずで、 なんだか気が抜けた。

ぼくはやっと、 って抱き合ったり、 渡り板が掛かると、 ぼそぼそとした音を鳴らして減速し、 陽を見つけた。 友達と嬉しげに笑い合ったり。 何人もの見知った顔が降りてくる。家族と久 船は港に着いた。 そんなみんなの奥に、

そしてぼくらは向かい合った。 陽は渡り板から港へ、まるでもつ ぼくが小さく手を挙げると、 陽も気付い たいをつけるようにゆっく てこちら に近寄 うり てくる。 と降り立

自然と頬が緩んだ。 ぼくは陽の顔を見上げる。 また背が大きくなったようだった。

しばらく何を言ったもの か分からず、 黙って向 かい ,合って

「おかえり」

ような照れ笑いを口元に浮かべて、 前より顔立ちが、 ぼくが言うと、 陽はちょ 聡くなった気がする。 っと笑った。 陽は目を細めながら冗談めか 少し痩せたろうか。 小さい頃から変わらない、困 して言っ びた。 った

声も少し低く、落着いたようだった。

そしてしばらく · の 間、 ぼくらはじっと見つめ合って

お二人さん」

先に降りてい Þ

よろしい ふたりでラブラ、 グブしてるの脇からちず  $\mathcal{O}$ のもいいんだけども」やちゃを入れてきた。

くは睨み付けた。 けれど崇嗣はまったく意に介さない。

人間性が悪化したんじゃないかと思う。 嬉しそうな崇嗣は、 続けて

「もひとり重要なゲ 11 るんですけど」

そしてパッと片手を広げもひとり重要なゲストが て指 し示す。 その 先に は、 髪の 短 V な

人が立っていた。

「お久しぶりぃ」

その人は、 相変わ 5 な丸 ĺ١ 声音で言った。

「元気してた?」

ひとみ先生だった。

「ひとみ先生」 ぼくは目を見開い た。それは中学校 の間ずっと教えてもらっ

生徒が ねた。 にひとみ先生も転任してい |徒がいない。これは神凪小学校もそうで、だから一昨年、ぼくらとぼくらの卒業と同時に生徒がゼロになった神凪中学は、未だにひと 0 たのだ。 ぼくは喜び半分、 驚き半分でこう尋 ぼくらと一緒 ŋ

「どうしたんです

「ひどーい、あたし帰って来ち ーやダ メだった?」

たずらっぽく先生は笑う。

11

「里帰りに決まっ てるじゃない

の人に怒られるのも、 って遊んだり、 先生はいつもジーパンにTシャツ姿になって、 ら今でもまだ、先生は二十五、六歳だろうか。 ってすぐにこの島の学校へ赴任してきて、 元々先生はこの島の出身で、漁師の い遊びを率先して考え出すのも先生で、その結果他のおとな 騒いだりしていた。 大体先生だった。 もうほとんど先生がリー 珠川さんの一人娘だ。 そこでぼくらは教わった。 放課後や休みの日になると、 ぼくらと島のあちこちへ行 教員免許を取 ダーみたいな

に落着いた色の長袖を合わせ、白いカところが今日先生の服に目をやって、 んだ。 カー ぼくは更に驚い ディガンを羽織 0 て長め る。 のス 力

どうかしたの?」

あたしがおとなし V 格好してたらへ ン ?

「うん、 しい かな」

「相変わらず口が悪い」

軽く睨み付けてきた先生は、でもすぐに笑った。

「まあ元気そうで何より。よかったよか った、安心した」

先生にも心配かけてたのかな、とぼくは気付いて、ようやく申し訳なく 考えてみれば、 先生とちゃんと会うのはあの日以来だ。

なった。

う話し終わったらしく、ぼくらのそばに集まってきていた。 ふと周りを見ると、 船から降りたみんなも出迎えに来た家の人たちとも

「ゆうちゃん」

いきなり柔らかな声に耳元で呼び か けられて、 ぼくは振り向 V

「弥生ちゃん、久しぶり。から、笑んで応えた。 でもない かな」

「うん、 私はお正月以来だね」

弥生ちゃんは白いワンピース、日除けの帽子に小さな荷物を抱えている。

その背後から、 のっそりと大きな影がのぞいた。

「俺も正月以来だな」

「健太、また声悪くな低くかすれた声で、 その彼は言った。ぼくは苦笑する。

また声悪くなってない? それにその格好」

「はは、 応援のしすぎ。 格好は、 今日暑いからさ」

っと笑って突っ立っていると、真っ黒い顔に白い目と歯が浮き上がいがぐり頭の健太は、もう真っ黒に日焼けしていた。野球焼けだ 野球焼けだ。 て見か

仕切り直すように、 ひとみ先生が口を開いた。

「で、 この後どうする? みんななにか予定ある?」

「予定ってなに、この島で? なにすんのさ、こんな何にもないとこで」

崇嗣が皮肉っぽい口調で言う。

ちゃんち行って説教されるだけ。 つまんね

私もこのまま家に帰るだけだけど」弥生ちゃんも言った。

健太も便乗する。

れ? は」ちょっと脇に目をやっ あいつどこ行った」 てから陽が言っ た。 「兄貴次第、 かな。

「お兄さんも帰ってきたの?」

「もーマジ大変だったぜ、 ぼくは全然気付かなかった。 船ン中でさあ。 崇嗣がまた横合 ずー っとひとみ先生に自慢話ば 1 カン 2ら口を挟 to

よねー っかしてんの。 とかさー」 なんか、 研修医の中でも俺は最高に優秀で困っちゃうんだ

「昔からだから」先生は笑って言った。 「あ しらうの も慣れてるし。

「で、言うだけ言って勝手に帰ったのか」

陽が辺りを見渡して言った。

すると先生が、少し明るい声を出して決めた。 じゃあいいや。 どっか行く?」

学校行こうか」

「じゃあ、

向かった。 出迎えの家の 人に話を伝え、 荷物を任せると、 ぼくらはそのまま学校

みんなは黙って一心に、坂の上を見すえているばかりだった。 少し震えた。気付かれなかったかと顔を赤らめながら周りを見たけれど、のの全てに身体が取り込まれるような気がして、ぼくはなぜとも分からず 甦ってきた。 まれるとふいに、毎日ランド んなで並んで学校への坂道を歩く。 記憶というか、 その頃感じた匂い セルを背負って通っ その 辺り た頃の記憶が鮮明に の見慣れた景色の中に包 空気、 そん なも

かれていた。 キの剥げた木造の校舎が左手の奥にある。 そして学校に着いた。坂 水飲み場や鉄棒、 小さなジャングルジムが、 の上はそのまま広い校庭につながり、 V つから使っていない 錆び付 いたままで捨て置 か分から 古 V  $\sim$ ン

ろん花などとっくに散って、今は緑葉が輝いていた。その視線の先、 へ目を向けると、校庭に幾本も生え並んだ大きな桜の木が目に入る。 向こうにはフェンスがあり、 それを越えた先にはひたすら海が見

の上にあるの

「 かり生えちゃって」 かし ー」ひとみ先生が口火を切った。 「なん カン 雑草 ば

0

セイタカアワダチソウが 確かに校庭のあちこちには、ぼさぼさとした草が生えてい によっきりと飛び出している。 た。 ちら

「誰も使わないからさあ。 仕方ないだろ」

一番使っていた健太が淡々と言った。 弥生ちゃんも小さな声で続 け

「今、生徒誰もいないんだよ、ね」

「みんなの年から後、 「親になるくらいの歳の人、みんな島から出てくし」 誰も生まれてないからねー」先生は、 少し寂しげ

ぼくらは黙った。 たぶんみんながみんな、 それぞれに責任を感じてい

「で先生、何するつもりでここ、やるせない空気を破って、陽け 陽はこう尋ねた。

来たんですか」

ようっていう」 別に」間の抜けた表情で先生は応える。 「記念にみんな

「なにそれ、来損じゃん」崇嗣は舌を出 した。 ゔ゙゙゙゙゙ 帰るかあ

「そんなこと言わない」先生がたしなめる。 「まあちょっとお喋り

ねえゆうちゃん」

らが小さい頃はまだ、普通に中学生として島にいたのだ。 んでもらったし、その頃からの習慣で、 ひとみ先生も、ぼくのことをこう呼ぶ。 ぼくも未だにこう呼ばれ続けてい 先生はこの島の よくぼくらも遊 出だか , c

ぼくらのことを、一生懸命名字で呼ぼうとしていた。 やん」で呼ぶようになったのだった。 てぼくらがくすくす笑っていたら、じきに諦めて前と同じ、「くん」や 「鳴橋ぃ」だの変に気取った改まった言い方をするもんだから、 そういえばひとみ先生も、 先生になりたての頃は、 でも せっ かくだから、 「宗像ぁ」だの

先生は続けて、 ぼくに尋ねてきた。

「そうだ、お祭りって、今年はいつごろ?」

神凪島では、 毎年夏のこの時期にはお祭りがある。 飛鳥馬神社を

りをする のだ。 のあちこちで篝火を焚き、 夜には境内で神事を行 った後、

い印象は、 持ちになるのだ。 待を抱かせる。 はまるで、見たこともない町が浮かび上がっているみたいだ 「わたがし」と書かれた幕が、内側からライトで照らされて、境内の中に盛大な何かが境内に現れたような興奮を感じた。大きく「やきそば」とか よく憶えている。たったそれだけなのに、あの頃はものすごくたくさんの、 やっている出店で、 しばらく練り歩いたら、後は夜遅くまで盆踊りをしておしまいになる。 さんが簡単な舞を少し舞って、それからその子をお神輿に載せて、 選んだ「お稚児さん」を座らせて、木の舞台を境内に造る。そこに小学 おばあちゃんに連れられて、 小さい頃は、とにかく祝詞が長いのにぼくはうんざり 町の住民みんなで見守る、 未だにお祭りの度に胸に蘇って、ぼくにあの頃と同じ大きな期 ってもそう大したものではなくて、 そして、 輪投げや射的、 目の前のちっぽけな祭の姿を見て、 そこに小学校 ほんの数軒建った近所のおじさんおばさんが というだけのものだ。 その前で神主さんが長々祝詞が校へ入る前の町のこどもの中 田一ヨー ・釣りをやって喜んでいたのを りしていた。 そしてその ちぐはぐな気 った。 。そして、 その強 お稚児

箱にお祭りの中を歩いたおばあちゃんの皺の1 やんよかったなあとおばあちゃ た。輪投げでやっと獲れた景品を見せに行くと、 入った柔らかい笑顔も頭に浮かぶ。手をつない んは優しい声で言ってくれて

「ゆうちゃんどしたの?」

ひとみ先生に声をかけられ、ぼくは我に返った。

はんの一瞬、ぼう、としていた。慌てて返事をした。

お祭? ええと、確か明日の夜だったと思う」

「明日あ?」

途端に先生のすっとんきょうな声が返ってきた。 崇嗣がやる気のな 1

なん で先生知ら ね えの ? だ か 6 みん な今日帰っ てきたんじ

いや、だって、わざわざあたしの親も教えてくれないし」

あ先生の年になって祭 りもねえよなあ

に言われて、先生はじろりと睨 んだ。 ってらんねっつうの」、気にせず崇嗣は続け け

明日朝から一日中手伝い。やってら つつう

ーそっか、 崇嗣くんに訊 くべきだったか

先生は独りごちた。

崇嗣だけが三歳くらいの時、 っと前、崇嗣のお父さんは神社を継がずに島から出ていき、そしてその後、 崇嗣はこれで、 飛鳥馬神社の神主さんの孫なのだ。 突然島へやって来て、 おじいさんの元に預け ぼくらが生まれるず

られた。 詳しい事情は、ぼくも知らない。

それから崇嗣は、 中学卒業までそのままずっと島にい て、 そして高校へ

唐突に迎えに来たお父さんの家でまた暮らすことになって、

島から出ていったのだ。

上がるとき、

「親父も先に俺を送り込んで、じいちゃ んの怒りを鎮めようっていうんで

「親父と幸奈さんが来るのは祭りの次の日だって。ポケットに手を突っ込んだ崇嗣は、投げやりに話 は、投げやりに話した。 手伝えっ

て  $\mathcal{O}$ 

なんとなく、 話にぽっかりと間が開いた。

すると、ちょうど良いタイミングで後ろから声が

「やあどうも。 川先生。 お久しぶりです

振り返ると、 坂を登り切 ったところで水垣先生が、 広い 額

チで拭っていた。

「いやあ厳しいです。この年でこの坂はもう無理です わ

そしてぼくらの方へ向き直ると、 先生は柔和な笑みを浮か べて言っ

「君たちも元気そうで」

しぶりです先生っ」

ひとみ先生を遮って、 やたら大きな声で健太が言 った。 水垣先生は

カチを仕舞うと、以前と変わらない落着いた声で応える。

「なんだ眞田、 おまえ真っ黒じゃないか」

眞田というの が健太の名字だ。 健太はし 、ちほ こば った格好で続けた。

「先生も、めっきり白髪が増えられて」

「一年や二年でそんな増えてたまるか」

先生は苦笑いしてカッターシ t ツの襟を動 カュ Ļ 風を入

いると下で聞 いたもんで」

お久しぶりです先生」

やっとひとみ先生が応える。

とても自由だ。 まこの島に居残って、 教え子の一人だ。ちょうどぼくらが卒業する年が定年だったので、 るらしい。先生には今はもう奥さんも子供もいない 水垣先生はずっと長い間、 今は島の歴史を研究しながら、 神凪中学で社会を教えて ので、そういう点 ので、そういう点では、のんびり暮らしてい V ひとみ先生も そのま

と思って信用している。よく知らない もしている。うちに来て、 面白いところらしい。 りもしていた。 島のあちこちを歩きまわ している。よく知らないけれど、なんでもこの島はなかなか他の人なら触らせはしないけれど、まあ先生のことだから お父さんの遺した本や論文やメモ書きも読 ったり資料を調べたり、古くからある家の W

水垣先生は更に言った。

「珠川先生も色々大変みたいですね。 こちら

は、

どれくらい?」

「一週間ほど。 ちょっと、ごたごたあって」

ひとみ先生は、少し変な顔で笑った。

「はあ。 僕でよければいつでも相談に乗りますから」そしてぼくら  $\mathcal{O}$ 方に

向き直って言った。「君らは、高校はどう? 順調かな」

するとなぜか、みんな苦笑いするばかりだった。 ぼくは首をかしげる。

水垣先生は声に出して笑った。

は、ちょっ 「君らも色々あるか。 分からないところは訊いておきなさい。」々あるか。まあそうだろう。鳴橋、珠川 しいな。歴史と国語、あと倫理くらいなら大丈夫だけ 僕では高校英語 先生が V 5 0 品や数学 やるう れど

った。朝からあれこれと忙しくて、すっ そういえば今日 は、 水垣先生のところ かり忘れていた。 へ質問に行こうと思っ 11 た

ぼくが頷くと、 ひとみ先生は急にわた わたしだし

「あたしも分かりませんよ、 あたし国語の先生ですから

いこの 間まで高校生だったでしょうが」

水垣先生があきれ顔で言う。 すると、 遠くを見つめながらひとみ先生は

「もう何もかも忘れましたよ、そんな昔のこと」

気はあの頃のままで、息を吸う度に、 やがて、 日の射し込む明るい廊下をきしませながら、ぼくらは歩く。 それから水垣先生も加わったぼくらは、一緒になって校舎へと向かった。 中学三年まで九年間ずっと使っていた教室にたどり着く。 小学校や中学校の頃の記憶が瞬い

誰かが、音を立てて引き戸を開けた。

黒板、 教壇、 掲示板、 蛍光灯。 何 一つ変わらず、

てがそのままに残されていた。

誰も、 何も言わなかった。

ていって、勢いよく椅子に座った。 やがて崇嗣が、静寂に耐えきれなくなったのか唐突にず そして、嬉しげに声を上げる。 カ ず ゟ゙ゝ 0

「うお、 懐かし、俺の力作まだ残ってんじゃん」

あの半年がかりの傑作な」陽が脱力した声で言った。

「ああ、

「谺祟嗣☆参」とあった。の絵が見えた。顔は崇嗣だ。 嗣が使っていた席だ。すると机の一面に、 力作ってなんだ、と思ってぼくはその机に近寄ってみた。中三のとき崇 絵の上に「鋼の筋肉」と彫ってある。 大きく彫られたボディビルダー 下には

「あと一息だったのに」

崇嗣がすこぶる残念そうにため息をつい た。

験に本腰入れたかと思ったら、読む振りしてそんなもん隠しとる。 「何が一息だ馬鹿もん」水垣先生が叱る。 てそんなもん隠しとる。わざわ「熱心に教科書立ててやっと受

ざ彫刻刀まで持ち込む奴があるか」

「コンパスが限界だったんです」崇嗣が弁解した。

じていた。 みんなが笑う。 しかしぼくは笑いながらも、 ぼんやりとした疎外感を感

、んが気付 V て、 ぼくに言っ

ゆうちゃん知らないよね

すると少し場の空気が冷めたような気がして、ぼくは申

健太が呟い

お前あ  $\mathcal{O}$ 頃、 もうい なかったか」

もう体調 大丈夫なの?」

とみ先生が心配げに尋ねる。 ぼくは笑って応えた。

つ頃からだったっ けか ? 齋夜が休 んでたの

健太にそう訊かれ、 ぼくは少し考えてから答えた。

「そんなにかあ」健太は柄にもなく感慨深げ 六月くらい から」 な声を出す。 「長えなあ」

おばあちゃんの面倒を見たり家事をしたり、

まり、 凪診療所の大先生がわざわざ問診に来てくれて、 と思っていたところ、 中学三年の六月頃に一度学校を休んだ。 その頃はまだ生きてい た陽の 少ししたらまた出られるか 他にもあれこれで疲れが もうしばらく休むように おじい さん、 つまり神

と言われたのだ。

けれど、 青い顔をしていたので、さぞかしみんなには心配をかけたと思う。 た。でも、 大先生と陽がよく来てくれたから、 のは三月、 とはいえ、まさか半年以上も休むことになるとは考えもしなかった。 途半端なことを繰り返していたら、 実のところ、十二月が過ぎた辺りではもう学校に出て来ることは出来た。 少し前から体調も悪かったので、 なんとなく気乗りせずに家で家事をやっては疲れて休んで、 その後一月二月もなにかと大変で、 みんなが揃って島を出るときだけだった。 そのうちこうなるだろうと思っていた そのまま中三が終わってしまった。 一番しんどい時期もなんとか乗り切れ 結局最後にみんなと会えた その時もまだぼくは 幸

でもやっぱり小さい頃からず そういうことになったのもみんなぼくが悪いのだから仕方ないけ 寂しかった。 Ó と一緒だ 2 たのに最後だけ 外れ てい たとい れど、

じゃな 「ゆうちゃん、 いけど」 小さい 頃から身体弱かったもんね。 まあ、 私が言えたこと

弥生ちゃんが慰めるように言うと、崇嗣が 軽口を叩く。

頃から身体弱えくせに、俺らと一緒にいっつもはしゃぎ回ってたよなー」 ション上がると俺らも引くような無茶してな」健太がにやにやする。 弥生ちゃ んはちゃ んとおとなしくしてたけど、 齋夜はちっ

「齋夜と喧嘩すると怖いんだよ、暴走するから」

飛ばして。 「みんなが小さい頃、 びっくりした」ひとみ先生も重ねて言い出す。 あたし横で見てたら急にゆうちゃん、 健太君を突き

「そう、あん時ホントやばかった。頭打って。すんごいコブが」

「ごめんって」ぼくは健太を遮って口を挟む。「もうしないよそんなこと」 そんな馬鹿な昔話を少ししていたと思ったら、 気付くと外から注ぐ日の

時間が経つのは、あきれるほど速かった。 光の色が変わっていた。ひとみ先生は腕時計を見て、もう五時だと言った。

帰り際にみんなで坂の辺りまで歩い てきたとき、 陽がぼくに小声で話

「齋夜。今晩、うちに食べに来ない? 久々だし」かけてきた。

「あー、うん」

ぼくは困った。普段なら、

おばあ

ちゃ

んを一人にしておく訳に

は

V

けれど今朝のことを思い出して、ぼくは答えた。

うん、なんとか。行けると思う」

10

布団を直したりして 家に帰ると、 いるうちに目覚めたけれど、 あちゃんはまだ寝て いた。 ぼくが部屋の換気を まだ調子はよくな 11 自 n

力で起き上がれないようだった。

かった。 だから無理も にから無理もない。おばあちゃんは、 目の焦点も合っておらかなりぼうっとしてい ておらず、 半日 髪も乱れて、 以上眠り続けて 顔色もよくな V るの

ぼくは、大きめの声で尋ねた。

「おばあちゃん、大丈夫?」

と言った。 すると、 そのままし おばあちゃんは口をもそもそと動かして、 びばらく待 0 7 V た け れど、 意味 ああ、 のある返事は とか、 うう、 なか

ぼくはだんだん、重たい不安を感じ始めた。

おばあちゃん、おかゆ作ってくるね

それでもおばあちゃんは、何も言わない。

でいるように見えて、ぼくは厭だった。それを忘れるために、 ばあちゃんの目がゆるゆるとぼくの方へ動い んの口にスプーンでおかゆを運んだ。ゆっくりと、それを何度か繰り返す。 これから、ずっとこうなのだろうか。 ゆを作り終えてからお茶碗によそって部屋に戻り、 ζì つになくその 横に座ると、お おばあちゃ 見が澱ん

頭に浮かんだそんな言葉を、ぼくは急いでかき消した。

半分ほど食べさせたところで、ぼくはおばあちゃんに尋ねた。

おばあちゃん、もういい?」

するとおばあちゃんは唐突に、はっきりと応えた。

「あんた、誰だ」

出て、そのまま家から飛び出した。信じられないほど胸が痛くなったぼくは、 茶碗とスプー

11.

ぼくは懸命に息を整えた。

目の

前の診療所は

暗

V,

この裏に回れば、

た。

もうほとんど日は沈んでいた。

薄暗い中にふっと人影が現れた。 こちらへ向かってくる。

「ああ。 今迎えに行こうと」そこで陽は言葉を切って、 眉を顰めた。

うかしたのか?」 そしてぼくの両の肩を軽くつかむと、 ぼくの顔をのぞき込んできた。

「てたそい?」くはうつむく。

「大丈夫か?」

少しの間、ぼくらはそのまま一緒にいた。ぼくは小さくうん、と 肯った。陽は何 ぼくは小さくうん、 ぼくは涙をぬがれて、待り ぐっ 2

**〜し、落着いた。** 

ぼくらは診療所の裏、 陽の家の玄関 向かった。 11 9  $\mathcal{O}$ 間に か周り

、なっていたけれど、まとわりつくように空気は蒸し暑かった。

陽のあとに 大先生が島に渡ってきた時に建てたものだから、 来ていた頃から 本当に久しぶ つい て歩 何も変わってい りで陽の家に入る。 いた。 なかった。 小さい頃何度も、 島では珍しい洋風建築で、 建物自体は古い。 毎日のように遊びに 。ぼくは、

ていた。 はいつもクラシ っているのだ。 大先生は旅行好きだったので、その 居間に入る。 ッツク 壁際には大きなオーディオセットがあって、これで大先生 部屋の棚の上に  $\mathcal{O}$ レコードを、 は、 ソファに腰掛 な おみやげがあちこち飾りっぱ  $\lambda$ だか よく分からない け、 本を読みながら 置物 はなしにな があ

が昔のままだった。 食卓には若先生、 陽の いないのは、 お母さん、 大先生だけだ。 お兄さんがもう着い てい た。 何も カュ

「いらっしゃい」若先生に言われ、ぼくは頭を下げた。

席に 落たものだった。髪も少し茶色い。 めないだろうけれど、 しぶりー、 勧められるまま、 いた。 お兄さんとお母さんは、 と軽い声でぼくに言った。 ぼくは席に着く。 若先生とよく似ている。 ぼくらの向かいに座る。 でも他はそのまんまだった。 前見たときと眼鏡が違う。 若先生は、 以前大先生が座 お兄さん 本人は認 小さな洒 って は 11 久

なるのだ。 じくお母さん似で、二人とも二重の大きな目をし お母さんとは今でもちょくちょく町で会って、 ている。笑うと同 話をする。 陽は ほくと同 顔

う恐縮した。 おかずはステー なぜか、 キと付け合わ 肉がみんな一口大に切ってあった。 せ、 サラダにスー - プだった。 は 1 0

「もう陽が急に言い出すから大変で。人数分しかないのに」

ません、 お兄さんが軽口を叩 お母さんは、 と言うと、い ステー いた。 - キを不思議そうに眺めるぼくに言った。 い の 11 いの、この子が言い 出したんだから、 ぼ と笑う。

で、巧妙なトリックですり抜けたわけだ」

「妙案でしょう?」 お母さんも冗談含みに得意げな声を出 した。

て言っ 食べやすくていいだろ」若先生も肩を揺らし、 「そういえばおばあさん、 大丈夫だったの?」 今度はぼ

**一あ、はい」** 

何かあったの?」 ながらも、ぼくはついさっきのことを思い出して胸が痛くなった。

陽がぼくの隣で声を上げる。 若先生とお母さんがあきれた顔をした。

るんだから」 「島の人の健康状態くらい、 頭に入れておきなさい。 お前だって医者にな

「おぅ、じいちゃんの受け売り」

お兄さんが言うと、途端に若先生は不機嫌な顔になった。

ぼくが今朝のことを簡単に話すと、急に陽の表情が曇る。慌ててぼく

本当に大丈夫だ、と取り繕った。

「じゃあ、いただきますか」若先生が言った。

ゆったりとした食事の時間が始まり、 もぐもぐとみんなでステ ーキを食

べた。最初に、お兄さんが口を開いた。

いんだし」 「でも、 そんなこと言うけど、陽だって別にこの島の医者になる訳じゃ

先生は言った。「陽、この診療所継ぐんだろ?」

「ん? ああさっきの話か」

一人合点なお兄さん

の言葉を少し考えて、

うん

下を向いて小さく、陽は答えた。

ぼくは知らなかった。 横を向いて陽の顔を見たけ れど、 その表情

も浮かんでいなかった。 少し自分の頬が 緩むのを、 ぼくは感じた。

正直に言って、すごく嬉しかった。

お兄さんは大袈裟に反応する。

「へえマジで か。 お前偉いな。 こんななん ない 俺やっ

「お前に任す」

「お前がそんなこと言ってるからだろう」軽くため息をついて若先生は言

「だって」少し息をつい たってなんにも変わらないだろ? 根幹産業になりそうなもんもない て、 お兄さんは皮肉な笑い 進歩も変化もない。 を浮か 観光地にもならない

「春文」若先生がたしなめる。もどんどん減って、少子高齢な 0 かり。 少子高齢化が 漁だっ 進んで。 て、 あれ 滅ぶ一方」 だろ、 Þ たるもんだろ。 人口

やたらとお喋りだ

港からそのまま荷物置く暇もなく引っ張ってこられて。 「俺もさっきまで脩 お兄さんは止まらなかった。相変わらず、 一手伝って祭りの準備してたんだけどさ。 でもほら、 あ の祭

客が来るわけでもないのに、 やる意味ある?」 りだってなんか、も一つぱっとしないっつうか。

惰性だろ?

島の

外から

だから」 「そういう問題じゃないだろう」若先生は言った。 「昔からあるも  $\mathcal{O}$ なん

お稚児さんいないらしいよ。神主さんが言ってた」らいいんだって」話すお兄さんは、どこか嬉しそうだった。「それに今年、「もうそういう時代じゃないって。見所もないし。いっそすぱっと止めた

ぼくと陽は、 驚いてお兄さんを見た。若先生は感慨深そうに呟い お母さんの方を

向いて訊いた。「去年はどうしてた」「へえ。いつかそうなるかとは思ってたけども」そして、

うけど」 「確か 篝 さんとこのお孫さんが、帰省ついでにここ何年かやっ てたと思

ないんだってさ」お兄さんは応えた。 「その子が小学校入っちゃって、 あと色々忙しくなったから今年は帰省

「陽は」若先生がお茶をすすりながら言う。「中学入るまでやってただろ 「本当は七歳までなんだって」お兄さんは言う。「小六のときな んかお前

ったよなあ、 厭がって。 あとで写真見るか?」

陽は横目でお兄さんを睨み付けながら言う。 ブルの隅でご飯を食べながらぼくは、 みんなの話を聞 「いらない」 1 て

た

こんな会話のある夕食は何年ぶりだろう。

子づいたお兄さんは、 まだ続ける。

ら今年は稚児舞もな で、 祝詞と神輿で済ます  $\subset$ 

んだ。 お兄さんはわざとらしく肩を竦める

もなにも仕方ない んだか 500 の流 ? Þ

一君はどうしてた?」お母さん が話を変えた。

お兄さ 店も出ようがないし。 で雑貨屋やるみたいだけど。まあ確かに安泰っちゃあ安泰だよね 「ひとみに振られてからさ、 いつもこの島と一緒に沈没するらしい 今は祭りの準備にいそしんでおります」 引きこもっちゃって。 よ」鼻で笑って

「ふう ん」お母さんは諦めたような相づちを打った。

「外は いものがすべてある。 ンもテーマパークもある」 よぅ、島の外は」浮かれた様子でお兄さんは話す。「ここにな ショッピングモー ルもカラオケも、 飲み屋もゲー

「勉強 しなさい」若先生が言った。

でございますっていう」 い出したように付け加えた。「うちの教授知ってたよ、じい 「してますって。 『僻地医療の第一人者だった』だって。 研修ん中じゃ一番優秀って言われてんだから」そして思 僻地だってさ。 こっちゃ僻地出 ちゃんのこと。

そしてお兄さんは一人、肩を揺すって笑っていた。

不機嫌な顔の若先生が座っている。 はなかった。 ぼくはずっと黙っている。 大先生がよく話しかけてくれたからだ。 小さい頃招いてもらったときは、 今、大先生の席には そんなこと

のじゃん。 するよ。 そこから手を加えるべきでしょ。ずぱっと伐採。 俺は思うよ」お兄さんの得意げな話はやまない。「あの山。 か知らないけどさ、 「色々やるべきだとは思うけど、 次会ったら町会長辺りに提案してやろうかな」 人が入ったことすらないんじゃないの? 今の時代、あんなの無用の長物だね。 してやっ て、 役に立 まずはちゃんと開発を進めるべきだね 一つ森に してやる、 何かしら建てるなり、 鎮守の森だかなんだ とりあえず、あ 原生林そのも 俺ならこう

付け合わせのトマトをつまんだ。

なんだけど。 や、祭りの 今、この・ 準備で面白い 島つ てこい 話聞いた」まだお兄さんの話は続く。 つらより年下のこども、 V ない だろ?

言葉を溜めるように口の中のものを飲み込むと、 お兄さんはおどろおど

こう言った。

「白い着物を着た長ぁい髪の小さなこどもが、 明け方一人で道を歩い

見た人がいるんだって」

ぼくは顔を上げた。お兄さんと目が合う。

どした? 君も見たの?」

「え、 別に」

ぼくはごまかした。 けれど脳裏には、 今日の昼、 あ の場所で見た光景が

はっきりと浮かんでいた。

隣をちらりと見る。 陽は、 表情も変えずにステー

キを切ってい

ぼくはおそるおそる、お兄さんに尋ねた。

「あの、 それってどういう」

の階段に腰掛けているのを見た、 の道を何度か、 「うん。 寝ぼけたおじさんおばさんの話だから怪し 小さなこどもが歩いてるのを見た、 とか。 ちょっと目を離したら消えてた、 つて。 いんだけど。 あと、 神社のあ 山のそば

「寝ぼけてたんだろう」若先生が決めつけた。

とか言う人もいたな」

ほら、 「ま、そうだろうけど。 お稚児さんの衣装も、 でも白い着物の子供だろ。 確かそんなのだったし。 かにもってい だからおじさんたち うか さ。

言ってたよ、 あれは和月ちゃんの幽霊だって」

ぼくは瞬きも出来ずにうつむいた。

「和月ちゃん?」若先生が怪訝に尋ねる。

舞も神輿も終わった後、騒いでるうちに消えたっていう」「ほら、だいぶ前に祭りの後で、突然いなくなった子がい たでし ţ

「ああ、 杜さんとこの和月ちゃんか」

ようやく思い出して若先生は言った。

「それ。 その子が化けて出たんだって」

「やめなさい 春文」お母さんが怖い声を出した。「まだ死んだと決まっ

訳じゃなし。 あなただって医者でしょう」

いらしい子だっ たからなあ」若先生は呟く。 十一年くらい経ってるでしょ。法律上は死亡扱い」 「祭りに乗じて来た人

- 29 -

お父さん」お母さんは更に叱った。 そこに至ってようやくお兄さんは、 いたように頭を掻いた。 「この子たちの友達だったんだから」 ず っと黙ったままの ぼくと陽に今頃

? そうだっけ。ごめんごめん

昔から、雰囲気の読めない人だった。

続けて若先生はぼくらに向かって、嬉

「いつも男の子二人の、女の子一人で一緒になって、 しそうに言っ あっ ちこっち走り

ってたなあ。憶えてるか、二人とも

忘れるものか。

ぼくら三人は一緒だった。 れば三人だけで、世界を作っていたのだ。 を眺めているだけのことが多かったけれど、いつだって楽しげに あとから一緒についてきていた。歳は、ぼくらより二つ三つ下だったろう あの頃は、ぼくらも島の他の子たちとあまり遊ばなかったから、 ぼくは和月ちゃん 本当に楽し そんなことも関係なかった。あの子は一緒にいて、 けれどあの頃は、 肩まで届くくらいの艶やかな髪の毛をなびかせて、 い のことを思い出す。すごくきれ そんなことは全然意識しなかった。女の子一人だと そしてい つも、 どこへ行くにも何をするにも、 あの場所 いな、 へ行って遊んだ。 ただぼくらの遊び 11 つもぼくと陽の わ V 言ってみ 子だ

幸せな。

けれど、 ある年の 夏

お祭りの最中に、 和月ちゃんは姿を消

おとなの身体では入り込めない 的に探したらしい。 ても見つからないままだ。 やんに泣きついたことしか憶えていない。しかし山はほとんどが原生林で、 当然、 誘拐事件としての捜査に重点が置かれたそうだ。 大変な騒ぎになった。本土から警察もたくさん来て、 ぼくはまだ小さかったから、 ところも多いため、 知らせを聞いておばあち 結局島の捜索は打ち切 そして、

方で島の人たちは、 神隠しだった、 と言っ て納得

それで終わりだった。

には神隠っ あ ってことになってたじゃん」 お兄さんはなおも話

中で生きていたとか」 が今になっ 「だからあれは幽霊か て戻ってきた か。 そうじゃなか それとも、 ったら神さまに連れ 年をとらない まま、 て行か つと山 のた

あの場所の光景がよぎる。

の子が、

月ちゃんが、

真っ暗な眼をして、

っと、ぼくを見つめて、

い加減にしなさい。 面白くもない

「だからそういう噂話なんだって」

お母さんは不愉快そうに言った。

けれどお兄さんは悪びれず笑う。

したのかな」 しも信じてい 「ひょっとしたら、 ない声で、若先生は小さく言った。「杜さんは、あたら、大きくなってふらっと帰ってくるかも知れな の後どう

だろ」 な」椅子の背にもたれて、若先生は天井を見上げる。 て。和月ちゃんのこと思い出すからって、家も放り出して外で寝泊まりす ら出ていって、 るようになって、最後には灯台に住むようになったって。聞いた話だけど」 「奥さんともめて」お母さんは残念そうに言う。「奥さんはそのまま島 そういえば、 旦那さんは仕事も出来なくなって、 生きてた頃は親父がちょくちょく様子見に行ってた あちこちうろつき回 「その後どうしたん <u>つ</u>

すると聞き流しているかに見えた陽が、 ふとぼくの方を見た

「なに?」ぼくは尋ねる。

齋夜は昔からよく灯台に行ってたから。 ねこを見に」

「ああ」ぼくは下を向いた。 「うん」

「へえ。今も行く? その、 杜さんって今、どうしてるの

お兄さんが気軽に尋ねた。 若先生もお母さんも止めない 自分たち

きたいからだろう。 話を逸らしようがなかった。

その」ぼくは口ごもる。

分からない眼をしながら、 まみれたざんばら髪に長く伸びた髭、こけた頬、どこを見てい 垢だらけの汚れた服を着て痩せ衰えた杜の

でている。そして、時々泣く。 誰も使わなくなった灯台の守番詰め所の奥で、 今もねこをな

ため息をついた。「市役所がこんなところまで来ると思う?」 「誰が給付するの」お母さんは若先生の茶碗におかわりをよそい「生活保護でも受けてるのかなあ」気のない調子で若先生が言っ なが

「何食べてるんだろ」陽もぼそりと言う。

「ねこ食ってたりして」お兄さんがにかっと笑った。

途端に部屋が静まりかえった。

「場をわきまえなさい」お母さんが一喝した。

食事が終わってお茶をいただきながら、 もうしばらく話をしたけ

やっぱり最後までお兄さんの独壇場だった。話の内容も、

神凪島はもうダ

ń

り返しだ。お母さんがたしなめる一方で、若先生はあんまり何も言わなか メだ、とか俺は向こうではもてるんだ、とか、そんな同じ愚痴と自慢の繰

った。きっと、 昔自分がそんなだったからだろう。

帰り際、陽とお母さんが玄関まで来てくれた。ぼくは頭を下げる。

「今日はありがとうございました」

「いいえ。おばあちゃんによろしくね」

お母さんが笑顔で応える。 陽は少し考えて言った。

「送ってくよ」

いよ別に。 夜だからって、なにが出る訳じゃないんだし

ぼくは断ったけれど、 陽は聞き入れてくれない。 妙に頑固なの で、

はなんだか不思議に感じた。やがて、 お母さんが言う。

「まあいい じゃない、久々なんだし。春文ばっかり喋ってろくにお話しも

出来なかったでしょう。 行ってらっしゃい」

そして、 お母さんはまた少し笑った。 陽は目ざとく反応した。

「なに」

「別に」

お母さんは微笑んだままだっ

玄関戸を開けると、 お母さんは声を上げた。

れ、靄ってる。 こんな時間に。 珍しい」

ほんの少し涼しい空気と湿り気が漂っ て 11 た。 お母さんは付け

加えた。

「明日は晴れるといいけど」

面の上の方にあって、 外へ出て歩き出すと、辺りは真っ暗だった。 薄ぼんやりとした霧に包まれていた。 そこからは島のすべての家と、そして黒い ぼくらの行く道は、 海 が見え

が怖いという気持ちも強かった。 ないわけじゃない。 並んで歩きながらも、 むしろ訊きたいことだらけだった。 ぼくらは黙って V だった。ただ、答を聞くのぼくだって話したいことが

唐突に、陽は言った。

「大丈夫か」

「うん」ぼくは小さくうなずく。

「無理するなよ」

「うん」

はそのまま手をつないで歩いた。 急に、 陽はぼくの右手を握った。驚いて、そして照れたけれど、 少し、 心が静まるのを感じた。 ぼくら

月が見える。

「おばあちゃん、また寝る?」ぼくは尋ねた。

流れるままに垂れ下がっているように見えた。

天井のどことも知

れな

視線が漂っていた。

げた。

昨日の晩に用意したお粥が炊けていたので、

ぼくは目覚めるとすぐに、

おばあちゃんの様子を見に行

今日もそれを食べさせてあ

ぼろぼろと口からこぼれたので、そのたびに拭いてあげないとい

なかった。ぼくは、

おばあち

やんの顔をじっと見た。

緊張が緩んで、

いっかいけ

「ああ」うめき声のような返事が返ってきた。「うぇあ

ぼくは、自分の胸がうつろになるのを感じた。

簡単に朝食をとってから流しを片付け、 縁側の雨戸を開ける。

昨日よりも深い霧に満ちていた。 空も曇っているので、

いけれど。

- 33 -

にいると気がめい も続いていた。 面ぼんやりとしている。海の方へ目を向けると、 に霧が出ているのは珍しかった。 の帰り際に崇嗣が、「全員祭りの手伝いに来るように。 外に出ると、 そうしてからぼ 奇妙なほど霧は深かった。いくら夏の朝とはいえ、こんな る。半ば逃げ出すようにして、ぼくは神社へと向かった。 たのを思い出したからだ。どうせすることもないし、 いそいそと出 視界が遮られるほどではないけれど、一 かける準備を始めた。 雲が切れ目なくどこまで ひとみ先生も」と 昨日学校

って応えてくれた。 一番上の段にちょこんと座っていて、ぼくが手を挙げると、 二百二十一段の階段を上り、ぼくは明日馬神社に着いた。 小さく手を振 弥生ちゃんが

地内ではなく町の中にあるけれど、とはい 肝心の崇嗣はいつまで経っても一向に現れない。神主さんの家は神その後待っていると陽、ひとみ先生、健太の順にやって来た。し やがて、神主さんに引っ張られるようにして崇嗣が来た。 え遅刻するような距離でもない。 神主さんの家は神社の敷 神主さんは言 カコ

「いやあ申し訳ない。こい 謝りなさい」 つがいつまで経っても布団から出てこんもんで。

「すんませんっしたー

ぼくらはさっそく準備を始める。 ふてぶてしく崇嗣は言った。そしてすぐに頭をは まずは神社の奥の物置から、してすぐに頭をはたかれた。 お祭り

鼓のばち、それから神主さんの身につける衣装一 使う細々した小物を出して、埃を払った。 ちょうちんや笛や小鼓、鉦、 式の入ったつづらを、

くと陽は二人がかりで持ち出した。

さんはろくにこちらも見ず、 てあった小さいつづらをぼくが手に取ろうとすると、 どこか投げやりな調子で首を振りながら言っ

それ ん。 今年は要らん

ぼくは つづらを置し 11 て、 少し の間それ を見つ 8 た。 そし  $\mathcal{O}$ 

しばらくすると、 力仕事をするために町中から男の 人が集まってきた。

さんも来ていた。 人息子の脩 一さんで、 人に延々 お 兄 おじさん さん 一方的に話 2数の は、横に かおじ 少ない しかけていた。 1 さん 人だった。 いる若くてひょろっと背の高い、 だった。 それは確か、 意外なことに、 雑貨屋 0 の暗

→ \/

くは、 れたとか、ぼくはよく知らない。 ひとみ先生は二人の姿をちらと見ただけで、よそへ行っ 陽のお兄さんが昨日言っていたことを思い出した。 振ったとか振ら てしまった。

拭きながら、 漂っていた。光が霧の中を乱反射して、 昼前になると、ずいぶん日が差してきた。 一通り道具を出し終えたところで、ぼくらは 陽が尋ねてきた。 まるでい け いったん休憩になる。 れど霧は相変わらず辺りを つまでも朝の ようだった。

「おばあさん、やっぱり今日も調子悪いのか?」

を忘れていたことに気づいた。 そう聞かれた時ぼくは初めて、 ぼ 今の今までまったくおばあち < は少し迷ってから答えた。

「たぶん、大丈夫」

大丈夫だということにした。

人かは、 が大変らしい。 神主さんの奥さんが持ってきてくれたお弁当をみんなで 午後の作業が始まった。おじさんたちは櫓や舞台を組み始め、 松明の台を担いで石段を下りてい 気付くと、陽と健太もその中に混じって働いてい 毎年これを島中に並べ 1 ただい た。 他 る 0 て の何か

ど、二人の姿を見て、すぐにそちらへ近寄っていった。 ぼくはお弁当を食べ終わってからしばらく弥生ちゃんと喋っていたけ 黒い木で出来た台を背負った筋肉質の健太が、 ぼくも 鼻で笑った。 手伝う、

なんでもやりたがりだよなあ。い 「齋夜があ? 無理だって、 これ重い っつも疲れてダウンするじ お前身体弱 いだろ? B 昔っ カコ

ぼくがむっとすると、横から陽も言う。

「もう二年前も経ったよ」 頃と違うんだから、 ぼくは食い やめとけよ。また調子悪くするかも知れな 下がる。 11

ぶ痩せたよ、 やめとい た方がいい。今疲れると、 前より」 飾り付けの方に行きなよ」 陽はなんだか寂しそうに言った。 夜の祭り見に来れ

そう言ってから、 陽はじろりと周りを見渡した。

「というか、今は齋夜よりも問題は、 崇嗣だ」

あいつどこ行ったッ」背中の台を揺らして健太が大声を上げる。

っかり忘れてた。 つの間にか逃げやがって」

ぼくは諦めて、弥生ちゃんたちのところへ戻った。 弥生ちゃ

たまま笑っていた。

「ゆうちゃん、 相変わらずだね

何が、と訊いても、 教えてくれなかった。

に飾り付け、ちょうちんを伸ばし 休みを終えたぼくらは、 鈍い 金色に輝く金属の飾りや御幣を、 て置く。朱い敷物を舞台に敷きながら、 舞台や櫓

ひとみ先生が神主さんに尋ねた。

アンテナでもいかれたかね?」 「大丈夫だよぅ、昨日天気予報では、夜には晴れるって言ってたから」注連縄これ、ま天気大丈夫ですか?」こんなに用意しておいて雨でも降ったら」 いや今朝から、テレビの映りが悪くってねえ。どうもみじゃみじゃが入る。 の入った箱を持ってきた神主さんが応え、 それから首をかしげた。

「あ、うちもそうでした」弥生ちゃ んが言った。

「へえ。 電波が悪かったんじゃないですか?」ひとみ先生が考えながら

生だった。 て、ぼくは尋ねた。 その時、 やあ、 鳥居の方からこちらへ歩いてくる小さな人影が見えた。 と言って笑い ながら、 ぼくらの元へ来る。 不思議に思っ 水垣先

手伝いに来たんですか

先生はごまかした。「それより、「谺さん。やっぱり予定でああいや、僕は書斎派だから」なんだかよく分からない やっぱり予定どおりやるん 言い訳を言っ

「ええ。 ついた。「だからといって、やらんわけにもい 仕方ないですからな」箱をいったん下に置い かんし」 神主さん は

「お稚児さんのことですか ?」ぼくは尋ねた。

「うん」神主さんは頷く。 横で弥生ちゃんとひとみ先生が不思議そうな顔をしてい 「こればっかりはね、 なんとも ならん るの で、 から ぼくが

昨日 カン べる。 てあげると、 二人ともずいぶん驚い て いた。 水垣先

はどうかと思うんですけども 「この祭りは稚児ありきのもの だか 5 抜かしてでもやるとい う Ó

となのだろう。 ま絶えてしまうかもしれんでしょう。 神主さんもはっきりとは言わなかっ し、私の代で終わらすわけには あの人のことだから、 神主さんの前でも遠慮せずにずけ いかな たけれど、 現に若い連中は面倒くさがっとる」 V きっと陽のお兄さん 一度やらんだら、 のこ

け言ったに違いない。

神主さんは苦々しく続けた。

地味だ、 のですわ。 「あの、 「祭りちうのは観光客を呼ぶためのもんじゃないと、 名前ってなんでしたっけ」ぼくはふと気になって訊いた。 もっと分かり易く島の名前でも入れたらどうだ、とか言い やれやる意味がない、 どうせならもっと派手にしろと。 何度言っても聞かん 名前も

すると神主さんは、悲しそうな表情をした。

祭』と言うんよ」 「ああ知らんか、 無理もない なあ、 誰も改めて呼ば んからなあ。

「さくら?」

節は春だ。 別桜が出てくるような祭でもなか ある岬くらいしか思い出せない。 どうもぴんと来なかった。 島で桜が咲い 他にどこかあったろうか。 った気がする。 ているところというと、 それになにより、 そもそも、 桜の季 学校の

んだ、と言った。 神主さんは、 山  $\mathcal{O}$ 森の中に は、 分かりにくいがちらほら立派な桜があ

「夏の桜も綺麗なもんだよ、柔い若葉が芽生えてね」

げた。「そうか、 そういう意味もあるんですか」水垣先生がいきなり 葉桜は新しい生命を表すか、 だから夏か」 感嘆の声を上

「まあ、 盆祭りといっしょになったというのもあるでしょうが ね

神主さんは微笑んだ。

意味って、なんですか先生」ひとみ先生が素朴に尋ねた。

君も国語の先生でしょう。 「他にも調べてみるとね、 自分で考えなさいよ」水垣先生は意地悪く言 『酒蔵』 の転訛だ、 という説もある」

ひとみ先生は首を傾げっぱなしだった。 神主さんが急に思い出して大声

「おお、

ちょうど戻ってきた健太が、おお、酒と言えば。おうい、 走ってこっちにやってくるところだ 0

健太君」

日焼けした筋肉は汗まみれだ。 顔をしかめてぼくは言った。

「うるせーな」ぼくを一頻り 睨 み付けると、健太は神主さんの方を向 11

た。

「なんでしょう」

「ほら、 「あれぇ?」っかしぃな。もう二時過ぎでしょ。 いつもの、 御神酒。 まだ来てないみたい なにしてんだ親父」そし なんだけど」

てすぐ後ろを向いた。「ちょっと行ってきます」

「ああ、 悪いね」

る店だ。 た。そしてずっとお祭りに御神酒を出している。 もっと酒屋が何軒も建ち並んでいたそうだ。残ったのが健太の家だけだっ 確か小学生の頃、水垣先生から聞いた。 ている。けれどそれ以前から造り酒屋を営んでいたらしい。昔この島には、 健太の家は眞田酒造という、島の中で一番大きく、 しかし神主さんの言を聞 一応店をちゃんと名乗ったのは江戸時代から、 く間もなく、 健太は駆けていった。 神主さんは言う。 そんなことをずっと前、 たぶん一番歴史があ ということになっ

酒屋さん継ぐわけだろう」 「しかしあの、 眞田さんとこの子も大変だね。まだ若いの あの大きな

体育科目の特別入試で受かったから、 「え」ぼくは思わず声を上げる。 健太は野球の強い高校へ進んで、確かプロを目指して頑張るはずだった。 と喜んでいたのをよく憶えている。 「健太が? 高校入ってからも思う存分やっ まだじゃない んですか」 てい

した。「違うんかな。 私はそう聞 いたが」神主さんはぼくの顔を見て、 よく分からん」 二、三度瞬きを

こって 健太のお父さんは、 小さい頃から野球馬鹿だから、当分跡継ぎは期待できない たぶん神主さんは、 野球なんかせずにとっ それをずっ とと継 と前に聞 11 いたのだ。 で欲 Ĺ V) どうあれ 、だろう。 と昔か

お酒というのも、 この祭りには重要だね

水垣先生が話を変えて、ぽつりと意味深なことを言った。

島中酔っぱらいだらけになる。そしてぼくは、 り酒くさくなるほどだ。祝詞が終わるとみんなが振る舞い酒を飲んで、 この祭りではすごくたくさんの御神酒を使う。 前からそれが厭だった。 の境内がほん

「しかし、一番大事なお稚児様がいない」神主さんが沈んだ声を出す。

こかの家に帰ってきてないかね、男の子は」

「あれってやっぱり男の子じゃないと駄目なんですか

ひとみ先生がまた訊いた。

「そりゃそうさ、山の神さまなんだから」

神主さんが当然のように答えた。 ひとみ先生は考え込んでしまう。

いさん二人は、にやにや笑っているだけだ。

結局、分からず仕舞いだった。

ちなみにその後しばらくして、 境内の 隅の 分社の 陰に隠れ てい 、る崇嗣が

捕獲された。

ない ぼくらは夕日を浴びた鳥居の前に集まる。 中がじめじめしていて暑かった。ぞろぞろとおじさんたちが家路につく中、 四時過ぎになって、 やっぱり今日は目に見えなくても霧が満ちているらしく、 作業は全部終わった。この季節、 まだ全然日は落ち そこい

にもならんところだ 「やあどうもありがとう」 った。 助かったよ」 神主さんが笑って言っ た。 「崇嗣 人じやどう

神主さんは続けた。 ど一緒だった。 会ったけれど、 その脇には仏頂面 体い 神主さんは、 の崇嗣が立っている。 つからこんな風だったかな、 腰が半分曲がりかけている。 背丈はもう、 とぼくは少し思った。 神主さんとほとん しばらくぶりに

「じゃあ、また八時に」

ればおばあちゃんにおぶわれて帰ったものだった。 この祭りは始まるのが遅い。 小さい頃などとにかく眠くて、 時間もす

宗嗣は歯を見せて笑いながら言った。

「みんな浴衣着て来いよ、浴衣」

もう何年も着ていない。 浴衣か、とぼくは考える。 以前 は 1 つも、 体どこに仕舞 おばあちゃ んに着せて 4つてあ

と毎年言っていたのを思い出す。 回しだけは変わらなくて、 んやり冷たかった。帯を巻くのにおばあちゃんが「ほら。 っていた。 箪笥の奥から出てくる浴衣はいつだって、 ぼくは聞 ぼくが結構大きくなってからもその言い らく度に、 笑いをこらえたものだった。 樟 脳 おてて上げ Ť

一旁不

陽に話しかけられて、ぼくは気がついた。

「大丈夫か? 無理して着てこなくてもいいんだぞ」

「俺が着せに行ってやるぜ、って?」キャー」崇嗣が言った。「ファラス・」無事して着てこれくてすりりとする」

ちの母親着物とかの着付け好きだから、 ってきたらたぶん着せてくれるよ」 「お前頭大丈夫か」ざっくり陽は言って、またぼくの方に向き直った。「う 一人で着られないなら、

「陽は?」ぼくは問うた。

「たぶん着せられる」

うんざりした顔で陽は応えた。ぼくは笑って言っ

「じゃあぼくも、探してみる」

開いた。まだ、おばあちゃんは寝ていた。ほとんど動いた様子もなか いつの間にか蝉がぶいんぶいんとやかましく鳴いていた。 そうしてぼくらは、銘々家に帰った。ずっと気付い 家に着くとぼくはおそるおそる、 おばあちゃんの寝ている部屋の障子を ていなか ったけれど、

になる。 ずっと見ていても微動だにしない。 意味もなく顔の上に手をかざす。 そして、そんなことをする自分が厭 ふと、不安になる。部屋にそっと入

しばらくぼくは、おばあちゃんの横に正座していた。

埃くささが鼻をつく。 それから奥の間へ、浴衣を見に行った。ふすまを開けて頭を突っ込むと、 一番奥に行李を見つけて、 引っ張り出した。

た。ぼくは手をつけようとして、逡巡する。おばあちゃんがまだ今のよう 明るい畳の上で開くと、 つた頃、 間ぼくはじっと眺めていた。 きれ いにたたんでくれたものだった。 中には丁寧にたたまれたぼくの浴衣が入って もったいなくて、ち

してしまうほど小さかった。 て手に取りると、 立ち上がって広げてみる。すると、 一体いつ着たきりだろう。 折り目はくっき それは吹き

きのことを、ぼんやりと思い出していた。 りと布に刻まれている。 手触りは柔らかくて、 そしてぼくはこれを着たと

として、と思ってさらにその下を見てみる。 きっとそうだ。おばあちゃんが一緒に入れてくれたのだ。 いから、誰のとも分からない。着ているところも見たことはない。 それは、お母さんの浴衣だった。 諦めてたたみ直していると、 まだ何かあると気付いた。鮮やかな色をした布だ。 行李の中、こども用のふわふわした帯の もちろん名前が書いてあるわけではな 取り出してみる。 それならひょっ

お父さんの浴衣があった。

ぼくは微笑む。

あちゃんの耳のそばで言った。 んはうっすらと目を開けて 「今から、お祭りに、行ってきます」 浴衣を抱えておばあちゃ おばあちゃんは頷 いた。 いる。 少し笑った、 んの部屋に戻る。障子を開けると、 ぼくは布団をかけ直してあげると、 気がした。 ぼくは息をついて、 おばあちゃ

「行ってきます」

ち上がる。

まるで赤ん坊のような、 振り返ると、 おばあちゃんはもう目を瞑っ 柔らかな寝顔だった。 てい

えていた。 まずは陽の家に寄っ 青地に黒い帯を合わせた締まりのあるもので、 て、 ぼくも浴衣を着付けてもらった。 よく似合ってい 陽はもう着終

陽の履いた下駄の音が、 それ から七時半頃、 ぼくらは家を出た。 かんこんとよく鳴った。 もうす 0 か ŋ 日 は 沈 んで V

々あちこちで、 篝火が燃されている。 そばを通ると熱いくらいの大き

₩.

に虫が いて飛び去った。 小の台に、 紅い 炎がよく映える。 脇の草むらからは、 Š 11

ろりそろりと進んだ。 気づけば霧が、 ぼく 十メ の知る限り初めてのことだった。ぼくら トル くらい先がかすむほどだ。 一段とひどくなっ て V た。 祭りの 炎 八の光で、 日にこん は乳白色の靄の中を、そ 霧の なことになるの 粒が とよく見え

と変わらない、 なで笑った。 をやっているはずだ。 途中で健太や弥生ちゃん、 弥生ちゃんも先生も律儀に Tシャツ姿だった。 またサボってい S とみ先生も合流 ないとい 浴衣を着て いけた。 れど、 11 て、 崇嗣は祭 と言っ 健太だけ ŋ の手伝 て、 は昼間 みん

と神社の方へと向か れば、よそのおじさんやおばさん、 道すがら、 みんなで昔の祭りの思い出話をして盛り上が 0 ていた。 島中の おじいさんやおばあさんも、 人が、 神社に集まっ っった。 て ぞろぞろ りを見

霧は深い。

上を見た。 やがてぼくら は、 あ 0 石段に着い 段の 下で立ち止まり、 ぼくはそ

大勢の人の背中だけが見える。薄暗い靄の中、木にいくつも 際限もなくひたすら続き、森つくって無言のまま立ち並ん 左右の森の暗が りの中にはあの くつも吊され てっぺんは霧でかすんで、何も窺えなから吊された提灯の明かりの下で、石段を上 森は山となり、 で 石 V る。 の置物が笑みを照らされ、 その更に奥はどこまでも森が 島となる。 顔に 深 0

霧の向こうの 神社 の中から、 太鼓と笛の音がどんどんひょうろうと響

しかし山は、静寂を守る。

ぼく 鼓動が始まって の胸の中 夏の匂いを吸っ では 幾歳になっ いた。 て高鳴る。 それは太鼓の音と重なり、 ても変わらない、 祭り になると湧き上が 祭りの空気と混じり

じゃあ、行こう」

陽が言った。

そしてぼくらは、祭りの中へ入っていった

鳥居をくぐると、 祭りが広がっていた。

境内の真ん中には高 二人の男の人が叩い V 櫓が組まれ、 ていた。 一方は雑貨屋の脩一さんだった。 頂上には大きな和太鼓が据えら れ

境内は橙色に包まれている。 な祭りの匂いに、ぼくは自分の息が荒くなるのを感じた。篝火と提灯で、 人いきれも混じり、 霧は熱波となってぼくらのもとに押し寄せる。

のかも ネを売ったりしていた。輪投げや金魚すくいやヨーヨー釣りもあった。 たおじさんおばさんたちが、 るのではない。 見渡せば左右それぞれ三軒ずつ、 早くもどことなく、 遊んでいるの 知れない。ぼくはそうした空気すべてに、酔ってしまいそうだった。 はおとなば お酒の 焼きそばを焼いたり綿飴をすくったり、 匂 かりだ。 いが漂ってい テント張りの出店が出て たぶん、 た。 金魚が欲しくて遊んで もう飲んでいる人がい いる。 。見知っ ラム

出店 ながら、これとい らといるだけ、こどもはぼくらしかいない ろうろと隙間を埋めるようにして動き回っ 豆をかじりながらビールを飲んで大声を出すおじさんが、何人も並んで 眞田酒造の出店もあった。 その赤ら顔を見るだけで、酒臭い息が鼻に感じられるほどだった。 へ向かったり、 て境内中をおじさんおばさん、 って何も為さず過ごしていた。、誰かに話しかけたり、ぼうよ 店の前に置かれた木の長椅子に腰掛け おじいさんおばあさんがうろうろう ぼうと座って遠くを眺めたり ていた。若い人はほんのちらほ とにかくたくさん のおとなが、 て、 い枝

体おとなたちは、 何を望んでここに来たのだろう。

ここにはも 何もない。

陽の声だけがはっきりと聞こえた

「神事が 始まるぞ」

気付け がば正面、 本社の 前 に造られた舞台の 周 ŋ 松明 が 具され、 紅 11

燃えるように揺らいでいる。

上には注連縄で結ばれた高い六本の柱、 そしてそれに囲まれた、

が据えら

この意味は きっと、 ぼくと陽しか知らな

御幣が、 は周囲 たげなお稚児さんが座っていた。 ずっと前から、変わらずに続く姿だ。記れて、すべてが燃え上がるようだった。 舞台も椅子も、金の神具で飾りたてられてい の森から採ってきた、枝や葉が重ねて置かれていた。 それらを取り巻くように並んでいる。 記憶の中の椅子にはいつも、 ぼくが小さい頃から、 る。 一番大きな松明二つに挟ま その周りに、 何枚もの それよりも おそらく 少し眠

けれど今は、 椅子の上には誰もい ない。

けていた。ぼくらは人混みの、一番前に出た。 かって少しずつ動き出す。 ぼくらは境内の奥へ進む。 でもほとんどの人は、 砂利が鳴る。 周りの 気にせず飲み食い喋りおとなたちも、舞台に 向

なのに。 て、 、後はちょこちょこ小さな神具が付いているだけの、舞台のそばには、この後で使うお神輿が置いてあった 神事が終わってからお稚児さんを載せて境内を練り歩くためのもの どうするのだろう。 った。 、とても軽そうなもた。上に椅子があっ

「あの神輿もね」

は浴衣を着て、 急な声に驚い 腕組みをしてい て振り返ると、 V 0  $\mathcal{O}$ に か水垣先生が立っ て 11 た。 先生

「本来は境内だけじゃなくて、 石段を下りて島全体を廻るはず Ó Ō

「あの階段を? 危なくないですか

陽が尋ねる。 すると先生は、苦笑いで応えた。

ては強 「危ないな。 い子も お稚児様が落ちるか、泣くか、 いて、大喜びではし やいで笑ったり それも大切だった。 吉兆だと尊ば 0

そして目を細 8

そうだよ」

松明が爆ぜる。「でも危ないから、

先生はぼくらに話す風でもなく、ずっと向こだんだん辺りに人が集まり、暑くなってくる。 ずっと向こうを見て、 人で語り続け

まえば過ぎたことだった。そして今年は、 「君らが生まれる前だったかな。 なんだか怖い 最初はあ お稚児様すら れこれ言ったけ V ども、 な 先生は緩 変えてし

そして黙ってしまった。ぼくらは何も言わ 11

何とも知れないことを喋り続けている。

渡った。 める。 の横に笛や鉦や鐘を持ったおじさんたちが立ち並び、 すり足で舞台の半ば うな力を感じた。 烏帽子に直垂をまとい、手に御幣を掲げた神主さんは、神主さんが、舞台へ足を踏み入れた。 神主さんが椅子の前に至ると同時に、櫓の上から盛大な太鼓の音が鳴り 太鼓と重なり合って、ぼくは身体が震えるような、身を打たれるよ 空気がびくりとし、 へと進んでいく。その身動きは、 おとなたちもすっと黙る。 ただただ静かだっ 徐々に吹き鳴ら 舞台の左右、 眼を閉じたまま し始 松明

れを感じた。 なんと言っているかはまったく分からない。けれどぼくは、ものすごい思と目を瞑ったまま、誰もいない椅子へ社へ山へひたすらに祝詞をあげる。 のにならない、 神主さんが大きな声を出す。 響き渡る声だった。 ぼくらに背を向けた神主さんは、 *\* \ つものかすれ老いた声とは比 きっ

向こう、 くには分からなかった。 興奮と不安に揺らされ 社を見つめてい た。 て、 ぼくは陽の方を見た。 目は少し細 められて、 陽はじっと神主さん 何を思っ て 11 る  $\mathcal{O}$ カン  $\mathcal{O}$ ぼ

一心不乱に神主さんは ぼくには分からない。 ぼくの胸の まくの胸の中にを唱え続ける څ و に はぐらぐらと不安が 何に 向 カン 0 7 か、 液膨ら 何 らん求 でめ

だった。 はしめって、 頭がぼやける。 気付けばぼ 息が出来ない。 目が眩み霞む。 ほんやりとした霧は、日が眩み霞む。これは、 は 辺り一帯を覆っては霧かそれとも目は ている。 眩 か、 たぶん ぼく  $\mathcal{O}$ 両 肌方

で渦を巻いている。 だんだん頭が痛くなってくる。 目を瞑ればそのまま倒 押さえつけるような鈍痛が、 ħ T 11 ける気がする。 付

このままでは ぼくは

立 っ て れる人の群に揉まれて、ぼくらは手をつなぐことすらままならな そう思って、 いなけれ ば。ぼくの手は空を掻く。あと小ぼくは右手で陽の左手を探った。 あと少しで届きそうなのに、 陽に掴ま 0 て、

そうして、 やっと行き着い と思ったときだっ

いたのか」

しかめる。お兄さんは見るからに酔って 陽のお兄さんが、 どこからか現れ た。 いた。 その声を聞い て、 は 露骨に

「お前こんなしけた祭りのどこが面白いんだよ。 0 5 V くぞあっ お

前もう十七だろ?酒ぐらい余裕だって。

来いよ。

俺が

教えてやる」

の顔を見た。 へと消えた。 そう言って、 陽はなにか言いたげな顔を見せたまま、 陽の右腕を取ってお兄さんは引きずっ てい そのまま人混みの ぼくは、 中

ぼくは自分の、 行き場を無くした手を見つめた。

「おい健太」

たりと歯を見せ笑っている。 振り返るとがっちりとした大きなおじさんが、 健太のお父さんだ。 健太よりもずっと太い腕で、 健太の襟首をつか 日焼けした顔ににっ W で

「店、手伝え。 忙しくなってきたから」

健太はつまらなそうな顔で、襟を掴まれたまま出店 0 方 え 7 11 0 た

「ちょっとちょっと。 弥生ちゃん」

そこに 今度は耳障りな甲高い いたのは、井戸さんだった。 声がした。弥生ちゃんはびくりとして振り返った

「ちょっと、こっちおいでって。

があるの。

おばさん、

お

母

さん

V

介してもらったの に頼まれてたでしょう、 お。 証券会社の人だって。お父さんのこと話した あの話。 おばさんの 知り合いに、 い年頃の ら、向

こうさんも乗り気みたい。 写真もちょうど今日届いて、 持ってきたか

ちょ っとおいで、見ましょ見ましょ、 ね

弥生ちゃんは悲しげな顔をして、 とぼとぼと井戸さんの 後に消 えた。

も仏頂面をして口をとがらせた、 ひとみ先生に話しかけた のは、 先生のお父さんの珠川さんだっ 白髪の漁師さんだ。 まるでこの 世 一の全て

とんの違うやろうな」 しらどんだけ ち来 何 つらの先生じゃない ったくその 心配しとるか分か こんなところで。子供ら引き連れて。あ たそうな口ぶ なんとか だろう。 っとんのか。 りで、 帰ってきてからぼうっとしくさって。 さんちう人は本当に 先生  $\mathcal{O}$ W お父さんは ? 来るの ほ れ、 もうお カュ ? 7 お V 騙され 前 もこ う

うに睨み付けた。 わえている。 そしてふう、 ぼくがそれで咳き込むと、、と煙を吐いた。人混みの - 先生のお父さんはぼくの中だというのに気にせ せず くを不愉快そ ^煙草をく

児さん りは消えていくしかない 今や限界ですな。 はこういうの ですかなあ。 めにした方が 「まあまあ、 町会長 になる子も 0 の鵜野戸さんだろうきついま まあ残念ですが。 いい お好きですからなあ。 若者もおらんし、 んではないかと、 おらんようになったことだし、 んで だっ 言い方をするなよ」横から しょうなあ。 た。 うん。先生はどう思われます 「おや。 うなあ。いやね、このタス、支えるのも老人ばかタ いやしか 私こう思っとるんですわ。 水垣先生、 し、こう っそ今年ですぱ よく の祭りも、 いう祭りという ゆ りだ。こういう祭 、お越 と顔を出 カコ ī まあ で。 0  $\mathcal{O}$ とや お稚 の も

ように 行っ うにして向こうに消え、それを仲ひとみ先生はその後もきついこと て しまった。 ことばかり言うお父さんに追いまくら 裁するため カン 水垣先生もどこ かれ

そうしてぼくは、一人になった。

が消 らといなくなったの 一度にみんないなくなったの え ていく カン 0 に言えるの 、のを、 の中、 ふと気付 ぼくはぼやけた目で眺 は長く続く祝 か、ぼくには け ばみん か、 詞の よく分からない。 それ ない 間 とも だ なくて、 め ったことだけだ。 少 んず 弱つ た耳で聞き それ へつ時間 ただうんうん が を空け 1 そし くこと つの んと響く祝 てみ かん な  $\mathcal{O}$ な

はか 左右から届く笛と鐘の音 ら祝詞を唱える。 まだまだ続 た塊はどんどん大きく 神主さ 太鼓は後ろから響き渡り、 んは な は り、 皺寄る 耳を痛め 強い 額 吐 つける。 に汗を浮か き気を感じ ~べ垂 る。 頭 は 5 け

つまでも、 ない。 聞きもせず、得手勝手に喋り続けている。 人が あ Ó いいいいである。 人が一之瀬さんで、あの人が岩倉さんで、島中から集まったおとなたちばかりだ。 見ようとすらしない。 このままでは倒れてしまう、 喋り続けている。 島はみんな知り合いばかりだ。 みんなどうでもいいことを、 黙っていたのは初めだけで、 そうぼくは思う。 あの人が御滝さんで、ぼくはみんな知ってい でも、 誰もぼくを見てい 今はもう祝詞を 飽きもせずにい いれど周 ている。 いる あ

ぼくを包み込む。 くを蝕む。 声声声が、 がやがやがやがやがやがやがや、祝詞より太鼓より大きな喋り声が、 ぼくの中に入ってくる。 目を閉じても耳は塞げず、 耳に手を当て首を振っても、 何を言っているのか分からな 声はぼ

ああ、気持ち悪い。

くなった。 ぼくはゆるゆると、 その場にし やが み込んだ。 浴衣 の裾を抱え込み、

頭を少し上げ、舞台の方を見やる。

舞台の向こう、本社の向こう、霧に覆われた森が、目に入る。

ロい着物を着た長い髪のこどもが、木の陰に立っていた。

はくは、ぞっとした。

急に動いて猛烈な立ち眩みを感じる。 立ち上がり、思わずそちらに背を向ける。 今にも吐きそうになる。 見たものを信じたくなか 0

あの子は。

ぼくは歯を食いしばり再び舞台の方へ向き直ると、

の子へ向かって、そのまま走り出した。

人の間を縫い走り続ける。 誰か  $\mathcal{O}$ 腕をかす 誰か の足をかすり、

は駆けた。

とわた飴と酒の胸焼けする臭い もうもうとし 必死になって走る。 た空気、 の汗の臭い、 松明の 誰かの吸った煙草の煙、 人 の熱、 まとわりつく霧を振

に声は止まら おとなたちもどうせお互い何を言っているの さっぱり分からない の中にこびりつく。 れどどこへ行っても追い掛けてくるおとなたちの声が、ごうごうと耳 ない。 わあわあわあわあわあと何を言っているのか そんなおとなたちの声が本当にぼくは、 し、周りに負けじとどんどん声は大きくなる一方で、 か分かってい ない ぼくには それなの

厭だった。

叫んだ。叫んでいないかも知れない「うるさいうるさいうるさいうるさいッ」 もう分から な

んだところで誰も聞 いてくれ ない 誰にも聞こえな 11  $\mathcal{O}$ だか

ら。

くは走り続ける。

の子が。

の子があの 子があの子が

あの子が。

き気、 となたちの喧噪はすべてを覆い隠して、 耳に入る音、 また頭痛と共に、 胸を打ち続ける太鼓のどんどんどんという爆発が足を絡め、入る音、まとわりつく声、吸い込む霧、澱んだ臭い、わき 橙色の光のうちになにかを見失う わき上がる吐 取 ŋ お

目の前が白く眩んだ。

なが 5 倒れ込んだ。

するとぼくは、 なにかに強くぶ つか つ た。

はじき返されてそのまま尻餅をつく。 茫然として、 見上げ

どこかのおじさんの背中に、ぶ 9 カュ 0 たようだった。

「あんだ。 痛えなあもう」

酔っている。 顔は赤く、 目はぼけて、 知った顔だけど、 手にビー 誰だったか。 ルの缶を持つ誰だったか分からないったか。ぼくはとっさに思い出せな

おじさんは、 顔をしかめて、

言った。

あぶねえじゃねえか。 つけろ」

おじさんは続ける。ぼくは、口を噤んだ。

で騒いじゃだ 前り 前見て歩かねえから、 だって、 おか さん教えてくんなかったか」、、ぶかるんだろお。人が一

るところ

なに か が、 ぽろぽろと壊れていくような漠然とした感覚を、 ぼくは覚え

ちゃ らや め よ とないよ。 「なん かったからよ ೄ あ たらどうよ。 たみ ったけど、こ つ いなか え ? い 口 開 いお、 て黙ってない ちゃ かってごらん。 何さ おじ りで出 5 る P か分優

人で満足してにたりと笑うと、どこかへ歩いていっぼくは、たぶん、怯えた目をしておじさんの顔を見 地面に座り込んだまま、 怯えた目をしておじさんの顔を見てい ぼくは、 周りを見回 てしまった。 る。

あ ま。 ま 神主さんうなって よ 大 だね 誰 11 てるの?」

は祭りも人が ない ね。 寂 もん ょ

肩だの腕 「健太、  $\mathcal{O}$ ひとケ にし くてい 向こうから運んでき 11 でしょう」 早 しなさい

あ は は はは馬鹿 んだ

ない 0 話な 弥生 B かな ん聞 てる? ほ 見て見 顔 11 11 よう?

ねえ。 「ほら、 私 もう まだい 杯どう すよ」 す。 酔うか にはもうべ んべろんにな んと、

昨日電話 お父 ったの」 人前 そん こと言わ 11 で 来る ら。 ちゃ

失われていく。 おとなたちの声が

テ から。 しょ 仕 ハ ない ねえ。 先生そん よう。残 古 ŧ 遠慮な です は古い 5  $\mathcal{O}_{\circ}$ こういう れ無 きこそ羽

お 「ほ 11 大 学 行 いって」 2 て大 たら 夫だよ も見て ンパで普通 飲む から。見 ぞ。 今の ってな ちか 慣 にも とい 方

らっ 親 めを思 恩を忘 向 て心配 て たか」 んだそ た 口 0 利 んだ。 方は。 そ んだ、な 偉 うに。 か。 は お 前 ŧ

「ほ 何ぼ っと き 弁護士 さい 聞こ で」 11  $\mathcal{O}$ 

「そ

の 人 が

11

この

0

飲め お前 0 そ と向こ て

11

けた 大 し 利 の で た か が が が が が が が が が が が が が が が が が が	17 あ 山 の を	何も聞こえなくなった。そして、	¬	ー カ <sup>ュ</sup>	¬	厭 す	ひっひう
の音、服や身体の擦れる音、 た物が立てる音は、よく聞ったがが立てる音は、よく聞っただ太鼓と笛と鐘と鉦の響き た関けて、喉を震わせ、今 地面に座り込んだまま、ぼったがが立てる。 ででである。 ででである。	あの子は、いの子は、いの子は、いの子は、いの子は、いの子は、いの子は、いの子は、い		_	<b>_</b>	ねぐ	そやし	ひはは
静まりかえっている。 立てる音は、よく聞っ 立てる音は、よく聞っ をり込んだまま、ぼっ 座り込んだまま、ぼっ をり込んだまま、ぼっ がで、喉を震わせ、今 何も聞こえない。	の間にか	なった。			輿	親	ん
にくさし	つの間にかいなくなっていた。				0	<b>偉</b> そ	く面白
で で で で で も で も、 それだけだった。 で も、 それだけだった。 で も、 それだけだった。 で も、 それだけだった。	っていた。		ے		今	す	0
がくとき、さりで 、 それだけだった。 の顔を見上げた。 のがま見上げた。					名	そ	٤
がりを がりを りを りを りを りを りを りを りを りを りが					٧١		ね、
見せているかと鳴				て	L	う。	いひ
そう そう そう かんしょう こう						私	

ゆっくりと立ち上が 金魚のように口を動かすおとなで溢れてい立ち上がった。おしりについた砂を払う。

りはぱくぱくと、

ころだった。それに合わせて、 り返って舞台を見る。 ちょうど神主さんが、 楽器の音がやむ。 祝詞を終えて踵を返すと

無音になった。

がり、 がり、 がりとおとなたちが踏みし 8 る砂 利の音が、 足下から湧き

上がるように辺り一面から聞こえてくる。

がり、 がり、 がり、 がり、 がり。

ぼくは、 ぼうっとしていた。

びくりとして振り返る。 陽が、 小走り でぼく  $\mathcal{O}$ 方へやっ

て来ていた。

ぼくのすぐそばまで来ると、 陽は言った。

「大丈夫、 か

「うん」

ぼくは小声で答えた。

小声でも充分聞こえるからだ。

言った。

陽は茫然とした顔で、

「兄貴と話してたら、急におかしくなった。

歯抜けみたいに声が聞こえな

くなって、 それで」

そして、何も言えなくなってしまった。 ぼくらは黙った。

ぐそばまでやって来たけれども、 また、こちらへ駆けてくる音が聞こえた。 二人とも最初は黙っている。 健太と弥生ちゃんだった。 ぼくは話し

かけた。

「聞こえる?」

ス運んでたら突然なんか、 「おう聞こえる聞こえる」健太は妙に大きな声でしゃべ 変になって。怖くなってさあ。 り出した。 逃げてきた」

「私も」弥生ちゃんは青い顔をして呟いた。「気付い たら、 おばさんの 声

が聞こえなくなってた。 それで周りを見たら、 もう」

くらはうつむいて、 しばらくそのままでいた。

ぱんぱ んぱん、 と大きな音がした。 びくりとしてぼくらは

わせながら、おばさんは無言で爆笑していた。ぼくは、 大笑いしている。けれど、笑い声は何も聞こえなかった。 頭の上から、 おばさんが、手を叩いて大袈裟に笑っていた。顔をくし また太鼓の音が降ってきた。 健太が言う。 目をそらした。 身体を激

担ぎ上げるところだった。周りの人は騒いでいる、 舞台の方を見ると、 空っぽ  $\mathcal{O}$ お神輿を、 おじさんたちが十二人が ようだった。 か り で

を廻り出す。 ん、ぱんと手を叩く音も聞こえる。 そうするうちに、 お神輿は持ち上げられた。 お神輿はやがてゆっくりと、 ぐらぐらと揺れている。  $\mathcal{O}$ 周 ぱ

騒ぎ、 ている、 開けて手をぶんぶん振っていた。 たぶんかけ声を上げているのだろう、 しかしひたすら無音のまま、 みたいだ。お神輿に集う大勢のおとなたちは、大きく揺れ、 そのかけ声に合わせてお神輿も揺らされ 付いて廻っている。 先導するおじさんが、 大きな口

不気味に見えた。 静かに担がれた誰も乗っていないお神輿は、 ひどく軽そうに、 なんだか

みんな、嘘のようだ。

手を叩いている人もいる。 周りを見る。ぼくらを取 て、 隣の人となにかを喋り合う人もいる。 口に手を当て、 囲むようにし て、 なにかを叫 おとなたちはたくさん 写真を撮る人もいる。 んでいる人も いる。

も聞こえなか っった。

んだよ」陽は強く声を出す。 「どうなってるんだよ」

しおとなたちは誰も、 振り向きもしなか った。

境内 太鼓の音はどんどん大きくなる。 の中 ぼくらは右へ左へ押される。 おとなたちはうねるように動き、 暑苦しい霧といっそう強くなる酒

「逃げるぞ」
波打ち出して、ぼくはぼくはぼくは、もう、の臭いと明滅する松明の炎が、またずるずるとぼくを酔わせて何もかもが

陽が言った。

ぼくらは、誰にも見つからないうちに神社から逃げ出した。